

## 『華嚴經』が説く「見える」ものや「見えない」もの：

「見えない」法身と「見える」色身の二身をもつての四身説

Two Invisible Dharma-bodies and Two Visible Rūpa-bodies

外村 中

### はじめに

『華嚴經（すなわち大方広・仏華嚴經）』は、大乘仏教を最も代表する經典の一つである。それゆえ、「見える」ものや「見えない」ものに関わる仏身についての理論を検討する上でも、必ずや目を通しておかねばならない重要な經典の一つである。しかしながら、周知のとおり、『華嚴經』の文章は難解であるために、その基本的な内容ですら必ずしも充分には理解されていないのが現状である。そこで、小稿では、これからの総合的な研究において『華嚴經』の内容を少しでも多く活用できるように、いわゆる『六十華嚴』および『八十華嚴』から仏身に関してとくに重要と思われる情報を抽出し、初歩的な考察をおこないつつ、その内容を分析整理する<sup>1)</sup>。その作業においては、先に解析した『法華經』や『（大乘）涅槃經』の内容などとの比較をもってすれば、『華嚴經』が説く理論の特徴が理解しやすいであろうと考えるので、仏身が①「見える」ものか「見えない」ものか、②廣大無限なるものか否か、そして、いわゆる常楽我浄なるものか否か、すなわち③常なるものか否か、④楽なる（すなわち変化をしない）ものか否か、⑤我なる（すなわち絶対的に有なる）ものか否か、⑥浄なるものか否かといった点などに着目する。そして、『華嚴經』が説くところは「法身」と「色身」という二つの言葉を立てての二身説といい得るものであることはすでにしられているが<sup>2)</sup>、実はそこから四身説を展開させることも可能であるらしいことなどをしめし、あわせて、北魏の雲岡石窟や唐の龍門石窟を検討する上で確認が必要であろうと思われる点などを指摘する。

なお、『華嚴經』の原典大本（完本）は伝わっていないが、次の二種の漢訳大本が現存する。

---

<sup>1</sup> 宇宙論に関連する『六十華嚴』と『八十華嚴』の内容については、次で検討したことがある。拙稿「漢譯『華嚴經』の原典『ブッダ・アヴァタンサカ・スートラ』の佛身論と宇宙論について」（以下では、参照記号として別と略す）。なお、小稿では、データベースとしてCBETAを利用する。そして、『八十華嚴』と『六十華嚴』の内容の対照および検証の便を図るために、漢訳原文を多く引用するが、筆者の判断により文章のリズムを優先して句読点を改めるところもある。また、わかりやすいように下線や丸数字などを挿入する場合もある。また、書き下しによる紙幅の浪費を避けるために、小稿では書き下しはおこなわず、もちろん小さな誤りはあろうが、日本にはすでに非常にすぐれた国訳の書き下しがあるので、それを参照することにし、『六十華嚴』では昭和・新纂国訳大蔵經（昭和と略す）の、『八十華嚴』では国訳一切經（一切と略す）の頁数をしめす。

<sup>2</sup> たとえば次を参照。梶山雄一『神変と仏陀觀・宇宙論』、218頁。

①『六十華嚴』（大正 9 第 278）は、東晋の仏跋陀羅（共通暦紀元後 359 年-429 年）が 418 年から 420 年あるいは 421 年に漢訳した六十巻本で、いわば主尊（あるいは教主）に相当するヴァイローチャナ Vairocana を盧舎那と訳す。

②『八十華嚴』（大正 10 第 279）は、唐の実叉難陀（後 652 年-710 年）が 695 年から 699 年に漢訳した八十巻本で、ヴァイローチャナを毘盧遮那と訳す。

## 1. 『華嚴経』の原典とその成立年代

原典はサンスクリット語で *Buddha-avatamsaka-nāma-mahā-vaipulya-sūtra* とされる<sup>3)</sup>。一説によれば、大本としては後 4 世紀中葉以前に、とくにクシャーナ朝の関連の下に北西インドで成立したらしいとされる<sup>4)</sup>。一方、中央アジアにおいて集成された可能性を指摘する説もある<sup>5)</sup>。したがって、成立の場所は依然不明である。

『華嚴経』（正確には『華嚴経』系）の基本的な考え方は、早ければ後 2 世紀はじめ頃までには成立していたようにも思われる<sup>6)</sup>。というのは、以下のようにも考えられるからである。

①『華嚴経』の事実上の説者は普賢（すなわち普賢菩薩）であることなどから、普賢は大本の構想に関わった『華嚴経』編者の創作であろうとする説がある<sup>7)</sup>。筆者は思うに、今日に伝わる諸仏典の内容から判断するに、その可能性はある。

②『法華経』には、普賢について説く普賢菩薩勸発品第二十八がある<sup>8)</sup>。その品には、シャカの入滅後「後五百歳」（すなわち入滅後 501 年から 1000 年まで）を記す内容が見られる<sup>9)</sup>。①から判断するに、この点は、『華嚴経』の考え方が「後五百歳」以前に成立し『法華経』に取り込まれた可能性があることをしめすものである。

③後漢の支婁迦讖（生没年不詳）が後 179 年に漢訳した小品系般若経の最古訳である『道行般若経』には「（色身と対をなす）法身」および「後五百歳」の記載はないが、鳩摩羅什が 408 年に漢訳した『小品般若経』には「（色身と対をなす）法身」および「後五百歳」を記す内容

---

<sup>3)</sup> 原典の梵名はチベット語訳からの推定である。梶山雄一『神変と仏陀観・宇宙論』、122 頁。なお、次は、*Buddha-avatamsaka-Mahāvaipulya-sūtra* とする。高崎直道『大乘仏教思想論』II、301-346 頁、312-316 頁。

<sup>4)</sup> 高崎直道『大乘仏教思想論』II、301-346 頁、312-316 頁。

<sup>5)</sup> 梶山雄一『神変と仏陀観・宇宙論』、120 頁。

<sup>6)</sup> 次は、原典のうちで最も古い章である「入法界品」および「十地品」は、単独の経典として「後 100 年前後」には成立していたとする。しかしながら、そう考えられる根拠は必ずしも詳しくはしめされていない。梶山雄一『神変と仏陀観・宇宙論』、93 頁、127-130 頁。なお、同氏は『ガンダヴェーハ』（すなわち「入法界品」の原典）の成立の下限は後 200 年頃とする（130 頁、222-223 頁）。

<sup>7)</sup> 高崎直道『大乘仏教思想論 II』、322 頁。

<sup>8)</sup> 小稿では、最も広く読まれているものであるから、後秦の鳩摩羅什（後 350 年頃-409 年頃、一説に 344 年-413 年）が 406 年に漢訳した『妙法蓮華経』を用いる。

<sup>9)</sup> 『妙法蓮華経』（巻 7）普賢菩薩勸発品第二十八 T09,62a「普賢。若如来滅後。後五百歳。若有人見。受持讀誦。法華經者。應作是念。...（岩波下 332）」

が見られる<sup>10)</sup>。これは、『華嚴經』が説く「(色身と対をなす)法身」についての考え方が<sup>11)</sup>、「後五百歳」になる以前に小品系般若經に取り込まれた可能性があることをしめすものである。

④シャカの入滅後「後五百歳」入りの年は、後 133 年頃と筆者は推定する<sup>12)</sup>。

以上により、『華嚴經』の基本的な考え方は、早ければ後 133 年頃以前すなわち後 2 世紀はじめ頃までには成立していたようにも思われるのである。ただし、『華嚴經』の諸品のうち最も早くに成立したものの一つとされる入法界品には、塔廟を立て仏像を制作することが説かれている。一方、インドにおける仏像の制作の始まりについては、一説によれば、後 1 世紀の後半までには始まっていたようでもあるが<sup>13)</sup>、いまだ詳しくは明らかになっていない。したがって、『華嚴經』の基本的な考え方が年代的にどこまで遡り得るものであるかについての正確なところは、今後の研究の展開を待つしかなさそうである。

◇『六十華嚴』(巻 60) 入法界品 T09,781c-782a「或為法師。讚歎佛法。禪思誦念。興諸福業。造立塔廟。諸妙形像。以香華鬘。恭敬供養。(昭和 1654)」

◇『八十華嚴』(巻 79) 入法界品 T10,437a「或為法師。奉行佛教。受持讀誦。如理思惟。立佛支提。作佛形像。若自供養。若勸於他。塗香散華。恭敬禮拜。(一切 1315)」

なお、『華嚴經』入法界品の原典の内容が『不可思議經』あるいは『不可思議解脫經』の名の下に龍樹(後 150-250 年頃)の考え方を伝える『大智度論』に引用されている<sup>14)</sup>。もし『大智度論』が説くその内容が龍樹によるものであれば、『華嚴經』の基本的な考え方は、遅くとも後 250 年頃以前したがって後 3 世紀前半までには成立していたことになる。

---

<sup>10)</sup> 『小品般若波羅蜜經』(巻 4) 不可思議品 T08,555b「舍利弗白佛言。世尊。後五百歳時。般若波羅蜜。當廣流布北方耶。舍利弗。後五百歳。當廣流布北方。其中善男子。善女人。聞般若波羅蜜。受持讀誦修習。當知久發。阿耨多羅三藐三菩提心。」『小品般若波羅蜜經』(巻 10) 曇無竭品 T08,584b「諸佛如來。不應以色身見。諸佛如來。皆是法身故。」なお、次による「(色身と対をなす)法身」についての指摘は重要である。梶山雄一『神変と仏陀観・宇宙論』、211-214 頁、218-221 頁。

<sup>11)</sup> 『華嚴經』の原典は、仏身に関して「法身」と「色身」の二身説を説いた最初の大乗經典(あるいはその一つ)といい得るものである。次を参照。梶山雄一『神変と仏陀観・宇宙論』、49 頁、218 頁、330 頁。

<sup>12)</sup> 拙稿「シャカの入滅年について」を参照。

<sup>13)</sup> 次を参照。辛嶋静志「大乘仏教とガンダーラ：般若經・阿弥陀・観音」、464 頁。

<sup>14)</sup> 梶山雄一『神変と仏陀観・宇宙論』、127-130 頁。Hikata, Ryusho: An Introductory Essay on Prajñāpāramitā Literature, pp.xxxiii-xxxiv, pp.lxviii-lxiv.なお、次は、イクシュヴァーク朝の社会情勢などから入法界品の原典 *Gaṇḍavyūha-sūtra* の成立は後 3 世紀とするが、次が注目する社会情勢という点では同様な(あるいはより相応しい)状況にあったらしい後 2 世紀はじめ頃のサータヴァーハナ朝ガウタミープトラ・シャータカルニ王の時代がなぜ採用できないか説明がないので、直ちにはしたがえない。Osto, Douglas Edward: *The Gaṇḍavyūha-sūtra*, pp.70-71, p.244. 当時のインドの社会情勢については次を参照。中村元『インド史 III』、289-307 頁、327-333 頁。

## 2. 『華嚴經』の内容の要点

『華嚴經』は、〈ブッダ（正確にはブッダの法身）はあらゆるところに遍く住している（すなわち遍満している）〉ので、衆生はどこに誰であろうと普賢行（あるいは普賢行願、要するに普賢が修行をおこなうにあたりめざしたところ）をおこないさえすれば、ブッダが現れてくれる（すなわち「見えない」法身が「見える」色身を発現してくれる）から、ブッダが「見える」ようになるので、ブッダにまみえることができるから、それでブッダから法を聞き、悟りを得る（すなわち自らブッダになる）ことができ、さらには無量の寿命を得ることができる」と説く經典といえそうである<sup>15</sup>。「見える」ものや「見えない」ものに関わる大凡の内容については、『華嚴經』を以下のように読むこともできよう。

◆次によれば、ブッダは、そもそもは「見える」ものらしいが、努力が足りない者には「見えない」とされる。少なくとも次からそのように解釈を展開させることはできよう。

◇『六十華嚴』（巻34）寶王如來性起品 T09,617c 「如來法身。非少福眾生之所能見。除佛神力。隨其所應。而示現身。」（昭和990、別2-17-f）」

◇『八十華嚴』（巻50）如來出現品 T10,267b 「佛身非是。少福眾生。所能得見。唯除如來。自在神力。所應調伏。若有眾生。因見佛身。便種善根。乃至成熟。為成熟故。乃令得見。如來身耳。」（一切807、別2-17-b.）」

◆次によれば、その「見えない」ブッダの身体を法身という。

◇『六十華嚴』（巻3）盧舍那佛品 T09,411c 「如來法身不思議。無色無相無倫匹。示現色身為眾生。十方受化靡不見。」（昭和79、別2-12-c.）」

◇『八十華嚴』（巻7）世界成就品 T10,37c 「諸佛法身不思議。無色無形無影像。能為眾生現現相。隨其心樂悉令見。」（一切105、別2-12-a.）」

◆次によれば、法身は、広大無限である。筆者は思うに、諸仏典の内容から判断するに、とくに広大無限なる法身を設定し理論を大いに展開させたのは『華嚴經』が最初（あるいはその一つ）であろう。

◇『六十華嚴』（巻30）佛不思議法品 T09,593b 「一切諸佛。悉有無量法身。離礙清淨。法界無量無邊。」（昭和889、別2-8-b.）」

◇『八十華嚴』（巻46）佛不思議法品 T10,244c 「一切諸佛。皆有法身。清淨無礙。於一切法。究竟通達。住於法界。無有邊際。」（一切739、別2-8-a.）」

◆次によれば、法身は、あらゆるところに遍く住している。したがって、筆者は思うに、どこで普賢行をおこなっても同じということになろう。なお、ブッダが遍満していることを、「華嚴（正確には仏華嚴）Buddhāvataṃsaka / Buddha-avatamsaka」というらしい<sup>16</sup>。

<sup>15</sup> 普賢行については、たとえば次を参照。高崎直道『大乘仏教思想論』II、323-324頁。

<sup>16</sup> 次によれば、Buddhāvataṃsaka とは、そもそもは「蓮華上に坐した一仏を中心として、その周囲に重々無尽に列なつた壮大な華座の仏の集団」を現す神変のこととされる。桜部建「華嚴という語について」、31頁下-32頁上。

- ◇『六十華嚴』（卷 51）入法界品 T09,723c 「佛身難思議。悉滿諸法界。（昭和 1413、別 2-6-f.）」
- ◇『六十華嚴』（卷 1）世間淨眼品 T09,399b 「如來法身等法界。普應眾生悉對現。（昭和 20、別 2-15-b.）」
- ◇『六十華嚴』（卷 53）入法界品 T09,738b 「知法界無量。智慧無量故。知法界無量無邊。悉見一切諸如來故。知佛法界無量無邊。詣一切刹。恭敬供養一切佛故。知法界無分齊。於一切世界海。行菩薩行故。（昭和 1474、別 3-3-d.）」
- ◇『八十華嚴』（卷 69）入法界品 T10,373a 「佛身不思議。法界悉充滿。（一切 1128、別 2-6-c.）」
- ◇『八十華嚴』（卷 2）世主妙嚴品 T10,7c 「佛身周遍等法界。普應眾生悉現前。（一切 18、別 2-15-a.）」
- ◇『八十華嚴』（卷 71）入法界品 T10,388b 「我知法界無量。獲得廣大智光明故。我知法界無邊。見一切佛所知見故。我知法界無限。普入一切諸佛國土。恭敬供養諸如來故。我知法界無畔。普於一切法界海中。示現修行菩薩行故。（一切 1172、別 3-3-b.）」
- ◆次によれば、法身は、平等である。したがって、法身との関わりは、誰であろうと同じということになる。
- ◇『六十華嚴』（卷 31）佛不思議法品 T09,599b 「一切諸佛。具足成就、細密法身。諸佛法身、境界無量。〈...〉。一切世間、所不能知。於三界中、無所染污。隨因緣應一切普現。非實非虛、平等清淨。...（昭和 912、別 2-24-b.）」
- ◇『六十華嚴』（卷 34）寶王如來性起品 T09,617c-618a 「譬如虛空性。無能執持者。普令諸群生。無礙造眾業。虛空無是念。我今何所作。云何而造作。為誰而造作。如是諸最勝。因此淨身業。普令群生類。成就白淨法。如來淨法身。饒益無量眾。法身亦無念。我利諸群萌。...譬如日出時。先照大山王。又復次第照。一切諸大山。次照諸小山。及餘高顯處。然後乃普照。世界諸大地。善逝亦如是。清淨慧日光。先照諸菩薩。功德大山王。爾乃次第照。一切諸緣覺。又復次第照。聲聞學無學。然後次第照。一切諸眾生。法身無是念。我有所照明。（昭和 990-992、別 2-25-b.）」
- ◇『八十華嚴』（卷 47）佛不思議法品 T10,250a 「一切諸佛。同一法身。境界無量身。功德無邊身。世間無盡身。三界不染身。隨念示現身。非實非虛、平等清淨身。...（一切 755-756、別 2-24-a.）」
- ◇『八十華嚴』（卷 50）如來出現品 T10,267c 「譬如虛空不可取。普使眾生造眾業。不念我今何所作。云何我作為誰作。諸佛身業亦如是。普使群生修善法。如來未曾有分別。我今於彼種種作。...譬如日光出現時。先照山王次餘山。後照高原及大地。而日未始有分別。善逝光明亦如是。先照菩薩次緣覺。後照聲聞及眾生。而佛本來無動念。（一切 808、別 2-25-a.）」
- ◆そして、次によれば、普賢行をおこなうと、ブツダの法身が色身を発現してくれるから、ブツダが「見える」ようになるので、ブツダにまみえることができるから、それでブツダから法を聞き、悟りを得る（すなわち自らブツダになる）ことができるとされる。この点に関しては、とくに以下の入法界品に記される文殊（すなわち文殊菩薩）が善財童子に遊行を促した時に説いたとされる偈頌の内容が参考になる。

- ◇『六十華嚴』（卷 34）寶王如來性起品 T09,617c「如來法身。非少福眾生之所能見。除佛神力。隨其所應。而示現身。（昭和 990、別 2-17-f）」
- ◇『六十華嚴』（卷 52）入法界品 T09,726b「清淨妙法身。除滅煩惱熱。非二現有二。為化眾生故。陰入及諸界。皆悉無所著。具行及色身。度脫一切眾。（昭和 1423、別 2-18-f）」
- ◇『六十華嚴』（卷 46）入法界品 T09,689b-c「爾時。文殊師利。為善財童子。以偈頌曰。善哉功德藏。能來詣我所。發廣大悲心。專求無上道。先發諸大願。除滅眾生苦。究竟菩薩行。成就無上道。若有諸菩薩。不厭生死苦。具足普賢行。一切莫能壞。功德光勝來。清淨功德海。正求普賢行。饒益一切眾。無量無有邊。世界諸佛所。聞說淨法雲。受持不忘失。悉於十方界。普見無量佛。成滿諸願海。具足菩薩行。究竟方便海。安住如來地。隨順諸佛教。逮得一切智。一切世界中。法王積劫行。具足普賢道。究竟佛菩提。一切刹劫海。修習菩薩行。滿足諸大願。成就普賢乘。無量諸眾生。聞彼名號者。修習普賢願。得成無上道。（昭和 1281-1282）」
- ◇『八十華嚴』（卷 50）如來出現品 T10,267b「佛身非是。少福眾生。所能得見。唯除如來。自在神力。所應調伏。若有眾生。因見佛身。便種善根。乃至成熟。為成熟故。乃令得見。如來身耳。（一切 807、別 2-17-b.）」
- ◇『八十華嚴』（卷 69）入法界品 T10,375b「法身恒寂靜。清淨無二相。為化眾生故。示現種種形。於諸蘊界處。未曾有所著。示行及色身。調伏一切眾。（一切 1136、別 2-18-c.）」
- ◇『八十華嚴』（卷 62）入法界品 T10,333c「爾時。文殊師利菩薩。為善財童子。而說頌言。善哉功德藏。能來至我所。發起大悲心。勤求無上覺。已發廣大願。除滅眾生苦。普為諸世間。修行菩薩行。若有諸菩薩。不厭生死苦。則具普賢道。一切無能壞。福光福威力。福處福淨海。汝為諸眾生。願修普賢行。汝見無邊際。十方一切佛。皆悉聽聞法。受持不忘失。汝於十方界。普見無量佛。成就諸願海。具足菩薩行。若入方便海。安住佛菩提。能隨導師學。當成一切智。汝遍一切刹。微塵等諸劫。修行普賢行。成就菩提道。汝於無量刹。無邊諸劫海。修行普賢行。成滿諸大願。此無量眾生。聞汝願歡喜。皆發菩提意。願學普賢乘。（一切 1008）」
- 〔文殊（もんじゅ）師利（しり）菩薩は、善財童子（ぜんざいどうじ）のために頌（じゅ）を説きて言うには。…汝（なんじ）は諸の眾生のために、願って普賢行を修め（おこなう）べし。汝は無邊際（むへんざい）の十方一切の佛にまみえ、皆悉く法を聽聞（ちょうもんして、説法を聞き）、受持し（おぼえて）て忘失（もうしつして、忘れ）ざるべし。汝は十方界において、普く（あまねく）無量（むりょう）の佛にまみえ、諸の願海（がんかい、大きな誓い）を成就（し、なしとげ）、菩薩行を具足（し、完成させる）べし。…能く導師（どうしの仏）に随いて學べば、當に一切智（いっさいち、すなわち悟り）を成すべし。…普賢行を修行し、菩提の道（さとりの道）を成就（し、なしとげる）べし。…〕
- ◆次によれば、悟りを得てブッダになった後、その法身は常住する。したがって、ブッダになると無量の寿命が得られるのである。
- ◇『六十華嚴』（卷 36）寶王如來性起品 T09,628b-c「如來常住如法界故。（昭和 1037、別 2-5-c.）」
- ◇『八十華嚴』（卷 52）如來出現品 T10,276b「如來常住。清淨法界。（一切 835-836、別 2-5-a.）」
- 以上のように筆者は『華嚴經』を読む。

### 3. 『華嚴經』の仏身論、法身と色身

『華嚴經』は、法身 dharma-kāya と色身 rūpa-kāya による二身説を説く。前節で分析したところによれば、法身は基本的には「見えない」ものらしいが、色身は「見える」ものとされる。ここでは、法身と色身の関係をさらに掘り下げて分析する。

◆次によれば、法身は衆生などを教化するために情況に応じて色身を発現する（させる）とされる。筆者は思うに、したがって、（衆生にとっては）真の仏事をおこなっているのは法身ということになる。

◇『六十華嚴』（巻3）盧舍那佛品 T09,408b 「法身堅固不可壞。充滿一切諸法界。普能示現諸色身。隨應化導諸群生。（昭和 60、別 2-18-d.）」

◇『六十華嚴』（巻30）佛不思議法品 T09,592b 「一切諸佛色身。常為眾生。而作佛事。（昭和 886）」

◇『八十華嚴』（巻6）如來現相品 T10,31a 「佛身無差別。充滿於法界。能令見色身。隨機善調伏。（一切 85、別 2-18-a.）」

◇『八十華嚴』（巻46）佛不思議法品 T10,244a 「所謂。一切諸佛。示現色身。為眾生作佛事。（一切 737、別 2-18-b.）」

◆ヴァイローチャナの法身は、有始無終で仏事を主宰する。筆者は思うに、『法華經』が説く（筆者による仮称ながら）久遠身（とも呼び得るもの）は、有始有終であるから特徴を異にする。次によれば、ヴァイローチャナは菩薩として修行した後にブッダになっている。したがって、ヴァイローチャナの法身は有始ということになる。

◇『六十華嚴』（巻3）盧舍那佛品 T09,412a 「當知此蓮華藏世界海。是盧舍那佛。本修菩薩行時。於阿僧祇世界微塵數劫。之所嚴淨。於一一劫。恭敬供養。世界微塵等如來。一一佛所。淨修世界海微塵數願行。（昭和 80-81）」

◇『八十華嚴』（巻8）華藏世界品 T10,39a 「此華藏莊嚴世界海。是毘盧遮那如來。往昔於世界海微塵數劫。修菩薩行時。一一劫中。親近世界海微塵數佛。一一佛所。淨修世界海微塵數大願之所嚴淨。（一切 110）」

◆次によれば、ヴァイローチャナの法身は、無終で仏事を主宰する。なお、ヴァイローチャナの法身は、『八十華嚴』では娑婆世界における仏事を主宰するとされるが、『六十華嚴』では蓮華藏莊嚴世界海における仏事を主宰するとも解釈されることについては、別稿を参照<sup>17)</sup>。

◇『六十華嚴』（巻3）盧舍那佛品 T09,408a 「盧舍那如來。轉清淨法輪。一切法方便。如來雲普覆。十方國土中。一切世界海。佛願力自在。普現轉法輪。一切佛土中。無量大眾海。言號各不同。而轉淨法輪。（昭和 59-60、別 2-11-b.）」

◇『六十華嚴』（巻3）盧舍那佛品 T09,410b 「或有諸佛清淨土。金剛力士掌中住。十力世雄盧舍那。常為一切轉法輪。（昭和 71）」

◇『六十華嚴』（巻30）佛不思議法品 T09,592b 「佛子。一切諸佛。有十種常法。何等為十。一切諸佛。常行一切。諸波羅蜜。一切諸佛。於一切法。常離愚癡。一切諸佛。常具大悲。一切諸佛。常具無量十力。一切諸佛。常轉無上法輪。一切諸佛。常度一切眾生。一切諸佛。常為眾

---

<sup>17</sup> 拙稿「漢譯『華嚴經』の原典『ブッダ・アヴァタンサカ・スートラ』の佛身論と宇宙論について」、239-236 頁（別 4-11.）。

生。成等正覺。一切諸佛。常應化度。一切眾生。一切諸佛。常行正念。不二之法。一切諸佛。常化眾生已。示現涅槃。諸佛境界。無有邊際。佛子。是為一切諸佛。十種常法。（昭和 885）」

◇『六十華嚴』（卷 36）寶王如來性起品 T09,628b「但如來欲令眾生歡喜故。出現於世。欲令眾生憂悲感慕故。示現涅槃。其實如來。無有出世。亦無涅槃。何以故。如來常住如法界故。為化眾生示現涅槃。（昭和 1036-1037、別 2-5-c.）」

◇『八十華嚴』（卷 6）如來現相品 T10,31a「毘盧遮那佛。能轉正法輪。法界諸國土。如雲悉周遍。十方中所有。諸大世界海。佛神通願力。處處轉法輪。一切諸刹土。廣大眾會中。名號各不同。隨應演妙法。（一切 85、別 2-11-a.）」

◇『八十華嚴』（卷 7）世界成就品 T10,35c「或有住於金剛手。或復有住天主身。毘盧遮那無上尊。常於此處轉法輪。（一切 99）」

◇『八十華嚴』（卷 46）佛不思議法品 T10,243c「佛子。諸佛世尊。有十種常法。何等為十。所謂。一切諸佛。常行一切。諸波羅蜜。一切諸佛。於一切法。常離迷惑。一切諸佛。常具大悲。一切諸佛。常有十力。一切諸佛。常轉法輪。一切諸佛。常為眾生。示成正覺。一切諸佛。常樂調伏。一切眾生。一切諸佛。心常正念。不二之法。一切諸佛。化眾生已。常示入於。無餘涅槃。諸佛境界。無邊際故。是為十。（一切 736）」

◇『八十華嚴』（卷 52）如來出現品 T10,276b「諸佛如來。為令眾生。生欣樂故。出現於世。欲令眾生。生戀慕故。示現涅槃。而實如來。無有出世。亦無涅槃。何以故。如來常住。清淨法界。隨眾生心。示現涅槃。（一切 835-836、別 2-5-a.）」

◆一方『華嚴經』は、有始無終である法身の「シャカ」は説いていないようである。「シャカ」という言葉をもって、そのようなシャカを説いていると思われる明かな内容を筆者は見いだせない<sup>18)</sup>。

◆けれども、次によれば、ヴァイローチャナの法身が発現した（させた）色身は、すなわちシャカともされる。

◇『六十華嚴』（卷 4）如來名號品 T09,419a「此四天下佛號不同。或稱悉達。或稱滿月。或稱師子吼。或稱釋迦牟尼。或稱神仙。或稱盧舍那。或稱瞿曇。或稱大沙門。或稱最勝。或稱能度。如是等。稱佛名號。其數一萬。（昭和 113、別 2-22-b.）」

◇『六十華嚴』（卷 50）入法界品 T09,717c「皆悉受持。正念思惟。智慧分別。彼諸佛法。顯現眾生。見知。未來彌勒佛等一切諸佛。現在盧舍那佛等一切諸佛。亦復如是。（昭和 1388）」

◇『八十華嚴』（卷 12）如來名號品 T10,58c「如來於此四天下中。或名一切義成。或名圓滿月。或名師子吼。或名釋迦牟尼。或名第七仙。或名毘盧遮那。或名瞿曇氏。或名大沙門。或名最勝。或名導師。如是等。其數十千。令諸眾生。各別知見。（一切 166、別 2-22-a.）」

---

<sup>18</sup> なお、この点については解釈が分かれるようで、たとえば次は、ヴァイローチャナはすなわちシャカ（〈ヴァイローチャナ〉＝〈シャカ〉）と解釈する。大竹晋「華嚴經の世界像：特に声聞乗との関係をめぐって」。もし同氏の説が正しければ、サンスクリット語原典では〈ヴァイローチャナ〉＝〈シャカ〉であったが、漢訳では〈ヴァイローチャナ〉≡〈シャカ〉とされたということになるかもしれない。要検討。

◇『八十華嚴』（巻 68）入法界品 T10,366b「我悉能持。我悉能憶。悉能觀察。分別顯示。未來彌勒佛等一切諸佛。現在毘盧遮那佛等一切諸佛。悉亦如是。（一切 1108-1109）」

したがって、以上によれば、〈ヴァイローチャナ〉≡〈シャカ〉（正確には〈ヴァイローチャナの仏身〉は〈シャカの仏身〉を部分集合にする）ということになる。それゆえ、『華嚴經』が説く主尊はヴァイローチャナと理解しておいてよいであろう。なお、「主尊」は「教主」といってもよいであろうが、『華嚴經』の内容はヴァイローチャナが直接的に説いたものではないから、ここではとりあえず「主尊」と呼んでおく。

#### 4. 二種の法身（有始無終の法身と無始無終の法身）

『華嚴經』は二種の法身を説いていると解釈することもできそうである。『華嚴經』が有始無終の〈ヴァイローチャナの法身〉を説いているのは前節で分析したとおりである。一方、無始無終で（根本たる（あるいは諸仏の総体が融合し一つになったものともいい得る）ブツダの法身）をも説いていると解釈を展開させることも可能なようである。次の内容は、そのことをしめす例としてあげられよう。次に説かれる法身は、「無有出世」で無始（むし・はじめなし）と、「無涅槃」「常住」で無終（むじゅう・おわりなし）をとらえることもできよう。

◇『六十華嚴』（巻 36）寶王如來性起品 T09,628b「但如來欲令眾生歡喜故。出現於世。欲令眾生憂悲感慕故。示現涅槃。其實如來。無有出世。亦無涅槃。何以故。如來常住如法界故。為化眾生示現涅槃。（昭和 1036-1037、別 2-5-c.）」

◇『八十華嚴』（巻 52）如來出現品 T10,276b「諸佛如來。為令眾生。生欣樂故。出現於世。欲令眾生。生戀慕故。示現涅槃。而實如來。無有出世。亦無涅槃。何以故。如來常住。清淨法界。隨眾生根。示現涅槃。（一切 835-836、別 2-5-a.）」

したがって、『華嚴經』は有始無終と無始無終の二種の法身を説いていると解釈を展開させることも可能であろう。

なお、『華嚴經』は、法身がいわゆる「一即多」の性質をもつことを説く（別 1-3.）。それはすなわち、法身が〈一は多と同じ〉で〈一仏が複数あわさり多仏の融合体となっても質と量は変化しない〉性質をもつことを意味する。したがって、『華嚴經』によれば、有始であるヴァイローチャナの法身が無始である根本たるブツダの法身に相互透過性（いわゆる無礙の性質）をもって融合することにより、一即多の原則が維持されているということになる。

また、筆者は思うに、おそらくは以上の無始無終の〈根本たるブツダの法身 dharma-kāya〉についての考え方を展開させたものが瑜伽行唯識派による四身説における自性身 svābhāvika-kāya の考え方で、以上の有始無終の〈ヴァイローチャナの法身 dharma-kāya〉に関しての考え方を展開させたものが同派による四身説における自受用身の考え方であろう<sup>19</sup>。なお、たとえば唐の玄奘が漢訳した『成唯識論』の四身説では、自性身、自受用身、他受用身、變化身が説かれる。また、さらに思うに、密教が説く大毘盧遮那 Mahāvairocana に関する考え方も、おそらくは

<sup>19</sup> 『成唯識論』巻 10 を参照。稿を改めたい。

以上の無始無終の根本たるブッダの法身についての考え方を展開させたものであろう。そうであれば、無始無終の根本たるブッダの名号こそ大毘盧遮那ということになる。要検討。

## 5. 法身の特徴その一

『華嚴經』が説く法身の特徴をより詳しく理解するために、ここでは、法身が「常樂我淨なる」ものか否か確認する。以下によれば、〈ヴァイローチャナの法身〉も〈根本たるブッダの法身〉もどちらも常樂我淨なるものではない。なお、①法身がそもそもは「見える」ものらしいが、努力が足りない者には「見えない」とされるものである点と、②法身が広大無限なるものである点は、先で分析したところである。また、「常」以外は、「一即多」の原則により、どちらの法身も同じになる。

③「常」については、前節で述べたとおり、〈ヴァイローチャナの法身〉は、有始無終であるから、ほぼ常なるものである。一方、〈根本たるブッダの法身〉は、無始無終であるから、常なるものである。

④「樂」については、次によれば、どちらの法身も仏事を主宰（作仏事）するから、樂なる（すなわち変化をしない）ものではない。なお、法身は色身をもって仏事を主宰するとされる。

◇『六十華嚴』（巻3）盧舍那佛品 T09,408b「法身堅固不可壞。充滿一切諸法界。普能示現諸色身。隨應化導諸群生。（昭和60、別2-18-d）」

◇『六十華嚴』（巻30）佛不思議法品 T09,592b「一切諸佛色身。常為眾生。而作佛事。（昭和886）」

◇『八十華嚴』（巻6）如來現相品 T10,31a「佛身無差別。充滿於法界。能令見色身。隨機善調伏。（一切85、別2-18-a）」

◇『八十華嚴』（巻46）佛不思議法品 T10,244a「所謂。一切諸佛。示現色身。為眾生作佛事。（一切737、別2-18-b）」

一方、『涅槃經』は、生身を發現する（させる）ことはあくまで方便であり仏事とはとらえないらしく、法身は何もおこなわない（不作不受）とする。したがって、『涅槃經』が説く法身は樂なるものである<sup>20</sup>。

⑤「我」については、次によれば、どちらの法身も空なるものであるから、我なるものではない。たとえば、以下の「非實非虛」と「非有非無」は空なるものであることを意味する。

◇『六十華嚴』（巻31）佛不思議法品 T09,599b「一切諸佛。具足成就、細密法身。諸佛法身、境界無量。◇。一切世間、所不能知。於三界中、無所染汚。隨因緣應一切普現。非實非虛、平等清淨。非去非來、無為無壞、清淨常住。一相無相、是法身相。非處非方、一切身身。自在無量、妙色無量。攝一切身。作種種身。隨方便身。普照一切。具足智藏。而無種種分別。其身充滿、無餘世界。說一切法界。雖動非動。清淨法身。非有非無。非方便、非不方便、隨眾生所應、悉能示現、非滅非不滅、亦非不現、而化眾生。一切功德寶、所起之身。一切法佛法起、如如法身。自然寂靜、於一切法、無所障礙。隨順一切法界。清淨一切世間。分別一切世間。無有

<sup>20</sup> 別稿「『大乘涅槃經』が説く」を参照。

動轉、無有境界、如來解脫、攝一切智、隨順一切身。佛子。是為一切諸佛第九大力那羅延幢佛所住法。（昭和 912、別 2-24-b.）」

◇『六十華嚴』（卷 51）入法界品 T09,723a「善男子。我已成就。菩薩寂滅定樂精進法門。悉見三世嚴淨佛刹。一切諸佛。及眷屬海。無量無邊。佛神力海。分別了知。佛名號海。轉法輪海。知彼諸佛。壽命無量。音聲微妙。法身清淨。充滿法界。亦不著如來。一切諸相。何以故。如來非過去。除滅世間一切取故。如來非未來。無所起故。如來非現在。無生身故。如來非滅。離語言道故。如來非實。現幻法故。如來非虛妄。饒益一切眾生出興世故。如來去無所至。滅死此生彼故。如來不可壞。法性無壞故。如來一性。離語言道故。如來無性。究竟法性故。（昭和 1410-1411、別 2-26-b.）」

◇『八十華嚴』（卷 47）佛不思議法品 T10,250a「一切諸佛。同一法身。境界無量身。功德無邊身。世間無盡身。三界不染身。隨念示現身。非實非虛、平等、清淨身。無來無去、無為、不壞身。一相無相法自性身。無處無方。遍一切身。神變自在、無邊色相身。種種示現、普入一切身。妙法方便身。智藏普照身。示法平等身。普遍法界身。無動無分別、非有非無、常清淨身。非方便非不方便、非滅非不滅、隨所應化、一切眾生、種種信解、而示現身。從一切功德寶所生身。具一切諸佛法、真如身。本性寂靜、無障礙身。成就一切無礙法身。遍住一切清淨法界身。分形普遍一切世間身。無攀緣、無退轉、永解脫、具一切智、普了達身。是為諸佛第九大那羅延幢勇健法。（一切 755-756、別 2-24-a.）」

◇『八十華嚴』（卷 69）入法界品 T10,372b「善男子。我得菩薩解脫。名寂靜禪定樂普遊步。普見三世一切諸佛。亦見彼佛清淨國土。道場、眾會、神通、名號、說法、壽命、言音、身相。種種不同。悉皆明觀。而無取著。何以故。知諸如來非去。世趣永滅故。非來。體性無生故。非生。法身平等故。非滅。無有生相故。非實。住如幻法故。非妄。利益眾生故。非遷。超過生死故。非壞。性常不變故。一相。言語悉離故。無相。性相本空故。（一切 1126-1127、別 2-26-a.）」

⑥「淨」については、次によれば、どちらの法身も浄なるものである。

◇『六十華嚴』（卷 30）佛不思議法品 T09,593b「一切諸佛。悉有無量法身。離礙清淨。法界無量無邊。（昭和 889、別 2-4-b.）」

◇『八十華嚴』（卷 46）佛不思議法品 T10,244c「一切諸佛。皆有法身。清淨無礙。於一切法。究竟通達。住於法界。無有邊際。（一切 739、別 2-4-a.）」

## 6. 法身の特徴その二

『華嚴經』が説く法身の特徴をさらに詳しく理解するために、ここでは、『華嚴經』が説くところと他の仏典が説くところとを比較分析する。

### 6-1. 大衆部の仏典が説くところ

『異部宗輪論』などによれば、大衆部が説く真のブッダといい得るものは、ブッダの法身ではなく色身らしい<sup>21)</sup>。大衆部が説く色身は、①心からブッダ（すなわちシャカ）にまみえたいと思い努力する者には「見える」ものであるが、そうではない者には「見えない」もので、②

<sup>21)</sup> 拙稿「いわゆる「仏陀なき仏伝図」に表現された」を参照。準備中。

必ずしも広大無限なるものではなく大きさは自由自在で、③ほぼ常（すなわち有始無終あるいは有始有終）なるもので、④楽なるものではなく、⑤空なるもので、⑥浄なるものであるから、③から⑥をまとめれば、常楽我浄なるものではない<sup>22)</sup>。なお、大衆部は法身も説いていたことはしられるが、詳しい情報が伝わらないので、その特徴は不明である。筆者は思うに、現在伝えられているところから判断するに、大衆部の仏身論によれば、シャカの色身はほぼ常なるものであるから、一世界一仏の原則により、弥勒が娑婆世界において成仏することはむしろかしいであろう。さもなければ、シャカは娑婆世界以外へ去らなければならないことになってしまう。また、小稿で着目する点に関しては、大衆部が説く色身が広大無限なる状態にある時には、その色身に『華嚴経』が説くヴァイローチャナの法身がもつほぼすべての特徴が見いだせそうでもある。この点は、おそらくは、『華嚴経』の仏身論が大衆部の仏身論を取り込んだ（あるいは展開させた）ものでもあることをしめすものであろう。ただし、大衆部の色身は法でもなければ法身でもない。

## 6-2. 有部の仏典が説くところ

『婆沙論』などによれば、有部（すなわち説一切有部）が説く真のブッダといい得るものは、法（要するにシャカの教え）で、有部においては、それがすなわち法身とされる<sup>23)</sup>。有部が説く法身は、①（少なくともそもそもは）「見えない」もので、②衆生の次元に住する者にとっては広大無限なるものであるが、ブッダすなわちシャカにとってはそうではないもので、③常なるものであるが、④楽なるものではなく、⑤（その成分は）我なる（すなわち絶対的に有なる）もので、⑥浄なるものであるから、③から⑥をまとめれば、常楽我浄なるものではない<sup>24)</sup>。なお、筆者は思うに、『華嚴経』の仏身論は、おそらくは、前節で述べた大衆部の説のみならず、有部のこの〈法を法身（すなわち真のブッダ）にとらえる〉説をも取り込んだ（あるいは展開させた）ものであろう。

また、次によれば、法（すなわち法身）は衆生の次元に住する者にとっては広大無限で、ブッダ（すなわちシャカ）にとってはそうではないことになる。

◇『阿毘達磨大毘婆沙論』（巻15）T27,74a「問。名為有邊際不。有作是説。名無邊際。法無邊故。於一一法。有多名故。復有説者。名有邊際。唯佛能知。餘無知者。以佛能知。名邊際故。名一切智。有説。佛及獨覺。知名邊際。餘不能知。有説。佛及獨覺。到彼岸聲聞。知名邊際。餘不能知。評曰。初説為善。唯佛能知。名之邊際。餘皆無有。一切智故。（一切280）」

<sup>22)</sup> 別稿「『道行般若経』が説く」を参照。

<sup>23)</sup> 拙稿「いわゆる「仏陀なき仏伝図」に表現された」を参照。準備中。なお、有部は、十方多仏（すなわち全宇宙空間に多仏）と考えていた大衆部や大乘とは異なり、十方一仏（全宇宙空間にブッダはシャカのみ）と考えていた。この点については、次を参照。岩井昌悟「一世界一佛と多世界多佛」。

<sup>24)</sup> 別稿「『道行般若経』が説く」を参照。

ただし、以上は、有部内において以上のように考えるべきとされたのは、『婆沙論』が編纂された時点であり、それ以前においては解釈が分かれていたらしいことをしめすものでもある。漢訳『婆沙論』に付された玄奘による頌および『大唐西域記』によれば、『婆沙論』はカニシュカ王（正確にはカニシュカ I 世）が編纂させたものとされる<sup>25)</sup>。そのカニシュカ王の即位年は後 127 年頃であったらしい<sup>26)</sup>。そうであれば、『婆沙論』が説く広大無限についての考え方が確立したのは、それよりも後ということになるかもしれない。また、有部は〈法身（正確には法性）は有なるもの〉とする<sup>27)</sup>。この点は『涅槃經』が説くところに通じるものである。

### 6-3. 『華嚴經』が説くところ

先で分析したとおり、『華嚴經』が説く〈ヴァイローチャナの法身〉は、①そもそもは「見える」ものらしいが、努力が足りない者には「見えない」とされるもので、②広大無限なるもので、③ほぼ常（すなわち有始無終）なるもので、④楽なる（すなわち変化をしない）ものではなく、⑤空なるもので、⑥浄なるものであるから、③から⑥をまとめれば、常楽我浄なるものではない。一方、『華嚴經』が説くいわば〈根本たる（あるいは諸仏の総体が融合し一つになったものともいい得る）ブッダの法身〉は、①そもそもは「見える」ものらしいが、努力が足りない者には「見えない」とされるもので、②広大無限なるもので、③常（すなわち無始無終）なるものであるが、④楽なるものではなく、⑤空なるもので、⑥浄なるものであるから、③から⑥をまとめれば、常楽我浄なるものではない。要するに、両者は、③ほぼ常（すなわち有始無終）なるものか、あるいは常（すなわち無始無終）なるものかという点で違いがあるものである。なお、『華嚴經』が説く法身は、いずれであれ仏事を主宰（作仏事）するとされる点で、『涅槃經』が説く法身とは異なるものである。先でも分析したとおり、『華嚴經』では法身は色身をもって仏事を主宰するとされるが、『涅槃經』では生身を発現する（させる）ことはあくまで方便であり仏事とはとらえられていないらしい点には注意しておく必要がある<sup>28)</sup>。

◇『六十華嚴』（巻 30）佛不思議法品 T09,592b「一切諸佛。常轉無上法輪。（昭和 885）」

◇『六十華嚴』（巻 36）寶王如來性起品 T09,628b「但如來欲令眾生歡喜故。出現於世。欲令眾生憂悲感慕故。示現涅槃。其實如來。無有出世。亦無涅槃。何以故。如來常住如法界故。為化眾生示現涅槃。（昭和 1036-1037、別 2-5-c.）」

◇『八十華嚴』（巻 46）佛不思議法品 T10,243c「一切諸佛。常轉法輪。（一切 736）」

<sup>25</sup> 『婆沙論』とカニシュカ王の関係については、拙稿「シャカの入滅年について」を参照。

<sup>26</sup> 公式な即位は後 129 年頃とする説もあるらしい。Falk, Harry (ed.): *Kushan Histories*, pp.8-9.

<sup>27</sup> 『阿毘達磨大毘婆沙論』（巻 9）T27,41a「答。我有二種。一者法我。二者補特伽羅我。善說法者。唯說實有法我。法性實有。如實見故。不名惡見。外道亦說。實有補特伽羅我。補特伽羅。非實有性。虛妄見故。名為惡見。（一切 153）」

<sup>28</sup> 別稿「『大乘涅槃經』が説く」を参照。

◇『八十華嚴』（巻 52）如來出現品 T10,276b「諸佛如來。為令眾生。生欣樂故。出現於世。欲令眾生。生戀慕故。示現涅槃。而實如來。無有出世。亦無涅槃。何以故。如來常住。清淨法界。隨眾生心。示現涅槃。（一切 835-836、別 2-5-a）」

また『華嚴經』入法界品は、常樂我淨を求めるのは衆生の誤った考え方であるとする。筆者は思うに、この点は、入法界品の原典が常樂我淨なるものを説く『涅槃經』よりも先に成立したものであることをしめすものでもあろう。

◇『六十華嚴』（巻 52）入法界品 T09,728b「觀察諸眾生。常樂我淨倒。愚癡闇所覆。煩惱起虛妄。（昭和 1434）」

◇『八十華嚴』（巻 69）入法界品 T10,377c「見眾生顛倒。執常樂我淨。愚癡暗所覆。妄想起煩惱。（一切 1140）」

#### 6.4. 『法華經』が説くところ

『法華經』が説く真のブッダといい得るものは、久遠身である。久遠身は、①心からブッダにまみえたいと思い努力する者（たとえば『法華經』を信仰し、受持、読、誦、解説、書写する者）には「見える」ものであるが、そうではない者には「見えない」もので、②広大無限なるものではなく、③ほぼ常（有始有終）なるもので、④楽なるものではなく、⑤空なるもので、⑥浄なるものであるから、③から⑥をまとめれば、常樂我淨なるものではない<sup>29)</sup>。この久遠身は、大衆部が説くブッダの色身に近似するが、この久遠身は有終なので、理論上、娑婆世界における弥勒の成仏に問題はない。したがって、筆者は思うに、『法華經』が説く久遠身についての考え方は、おそらくは大衆部が説く色身に関する考え方を展開させたものであろう。なお、『法華經』が説く久遠身は、法を説くものであって、広大無限ではないから法そのものではない（したがって法身とはいえない）点をもって、有部や『華嚴經』が説く法身とは特徴を異にする。ついでながら、『法華經』を信仰するグループは、『華嚴經』を信仰するグループとは大きく異なるものであったらしい。というのは、『法華經』のグループは、次によれば、王族とは付き合うべきではないとする立場であったことがしられるが、

◇『妙法蓮華經』（巻 5）安樂行品第十四 T09,37a「菩薩摩訶薩。不親近國王。王子。大臣。官長。（岩波中 244）」

一方、『華嚴經』のグループは、そうではなく王族とは近しい関係をもっていたらしいからである。ヴァイローチャナの色身であるシャカが祇洹林（逝多林いわゆる祇園精舎の地）で師子奮迅三昧（師子頻申三昧）に入り神変を現した時に、その神変が声聞乗の者たちには「見えない」ものであったが、大乘の菩薩たちと世界（世間）の諸王たちには「見える」ものであったといわれる点は、そのことをしめす例としてあげられよう。

◇『六十華嚴』（巻 44）入法界品 T09,680a「一切菩薩。世界諸王。亦復如是。…是故。一切諸大菩薩。悉覩如來。不可思議。神變境界。深入明達。究竟彼岸。一切聲聞。諸大弟子。皆不能知。（昭和 1242）」

---

<sup>29</sup> 別稿「『法華經』が説く」を参照。

◇『八十華嚴』（巻 60）入法界品 T10,323b-c 「一切菩薩。世間諸王。亦復如是。…是故悉見。如來世尊。不可思議。自在神變。一切聲聞。諸大弟子。皆不能見。皆不能知。以無菩薩。清淨眼故。（一切 979）」

#### 6-5. 『涅槃經』が説くところ

『涅槃經』が説く法身は、①衆生の次元に住する者には「見えない」ものであるが、ブッダの次元に住する者には「見える」もので、②広大無限なるもので、③常なるもので、④樂なる（すなわち変化をしない）もので、⑤衆生の次元に住する者にとっては空なるものであるが、ブッダの次元に住する者にとっては有なるものであり、したがって我なるもので、⑥淨なるものであるから、③から⑥をまとめれば、常樂我淨なるものである<sup>30</sup>。筆者は思うに、『涅槃經』が説く法身についての考え方は、おそらくは『華嚴經』が説く〈根本たるブッダの法身 dharma-kāya〉に関する考え方を展開させたものでもあろう。また思うに、『涅槃經』が説く法身についての考え方をさらに展開させたものが、おそらくは瑜伽行唯識派による四身説における自性身 svābhāvika-kāya の考え方であらう。なお、『涅槃經』は、ブッダが「見える」ようになって後に悟りが得られ、そして最後に大般涅槃に入ると説き、〈大般涅槃（すなわち眞の涅槃）〉＝〈眞の解脱〉＝〈ブッダの法身〉と説く。

#### 7. 二種の色身

『華嚴經』においては、色身についても二種の色身が説かれているようにも解釈される。したがって、二種の法身とあわせて、『華嚴經』が説くところから四身説を展開させることが可能なようにも思われる。そして、二種の色身のうちの一つは〈法身が衆生らを教化するために情況に応じて発現する（させる）から「見える」色身〉で、この色身は先述したところである。なお、この色身は『涅槃經』が説く生身（いわば垂迹身）に相当するものともいえよう。一方、生身に相当するものではなく、ヴァイローチャナと根本たるブッダの〈そもそも「見える」ものであるから、ありのままに「見える」色身（いわば如なる色身）〉というのもありそうである。というのは、〈淨光眼（毘盧遮那眼）を得たら、（普通であれば「見えない」）ブッダの法身が「見える」〉とされるからである。

◇『六十華嚴』（巻 57）入法界品 T09,762b 「得淨光眼。見佛法身。得普明眼。觀不思議如來色身。（昭和 1576）」

◇『八十華嚴』（巻 76）入法界品 T10,414b 「得毘盧遮那眼。見佛法身故。得普光明眼。見佛平等不思議身故。（一切 1249）」

以上の〈そもそも「見える」ものであるから、ありのままに「見える」色身〉と〈「見えない」法身〉は、見る側に問題があるだけで、実は同じものととらえることもできよう。そうであれば、『華嚴經』が説く「色身」は、こちらの場合もあり得るから、〈色身 rūpa-kāya〉≡

<sup>30</sup> 別稿「『大乘涅槃經』が説く」を参照。

〈生身 nairmāṇika-kāya (あるいは nirmāṇa-kāya)〉ということになり、『涅槃經』が説く(法身が発現させる)「生身」とは必ずしも同じものではないことになろう。

なお、筆者は思うに、いわゆる生身ではない色身についての考え方を展開させたものが、おそらく『大智度論』が説く法性生身であり、さらには瑜伽行唯識派による四身説における他受用身 saṃbhogika-kāya (あるいは saṃbhoga-kāya) であろう。一方、いわゆる生身は、同派がいうところの變化身 nairmāṇika-kāya (あるいは nirmāṇa-kāya) に相当するものであろう。ついでは、生身が発現した(させた)分身のようなものは、化身 nimitta-kāya とされるようである<sup>31)</sup>。

また、以上の入法界品の話は、善財童子が遊行中に、(シャカの実母であり、すでに亡くなっていた)摩耶夫人にまみえる前に、浄光眼を得たとする話である。これは修行により「見えない」ものが「見える」ようになることをしめすものであり読み落とされてはならないであろう。というのは、『涅槃經』にも同様な過程(すなわち修行により「見えない」ブッダが「見える」ようになること)が説かれているからである。

## 8. その他の情報

以下、『華嚴經』と文物や芸術作品との関係を考える上で重要であろうと思われる情報を整理する。

### 8-1. 普賢、文殊、弥勒

『華嚴經』においては、上位から順に普賢、文殊、弥勒とする序列が認められる。普賢が最上位であることは、先でも述べたとおり、『華嚴經』が普賢行をおこなうべきことを説く經典であることから明かであろう。三者の序列については、入法界品の内容が参考になる。

◆入法界品は以下のように説く。普賢そして文殊が上首(すなわち代表)で、五百人の菩薩(すなわち菩薩摩訶薩)たちを伴っていた。

◇『六十華嚴』(巻 44) 入法界品 T09,676a 「爾時。佛在舍衛城。祇樹。給孤獨園。大莊嚴重閣講堂。與五百菩薩摩訶薩俱。普賢菩薩。文殊師利菩薩。而為上首。(昭和 1227)」

◇『八十華嚴』(巻 60) 入法界品 T10,319a 「爾時。世尊在室羅筏國。逝多林。給孤獨園。大莊嚴重閣。與菩薩摩訶薩五百人俱。普賢菩薩。文殊師利菩薩。而為上首。(一切 967)」

◆その五百人の菩薩たちは普賢行を成し遂げた者たちであった。

◇『六十華嚴』(巻 44) 入法界品 T09,676b-c 「如是等。五百菩薩。此諸菩薩。皆悉出生。普賢之行。(昭和 1228)」

◇『八十華嚴』(巻 60) 入法界品 T10,319b 「如是等。菩薩摩訶薩。五百人俱。此諸菩薩。皆悉成就。普賢行願。(一切 968)」

◆文殊は善財童子に普賢行をおこなうべきことを説いた(先述)。それで、善財童子は遊行を始めた。

---

<sup>31)</sup> 荻原雲来(編)『漢訳対照梵和大辞典』、691 頁。

◆善財童子が遊行中に弥勒にまみえたところ、弥勒は善財童子に次に文殊にまみえるように促した。

◇『六十華嚴』（巻 60）入法界品 T09,783b「善男子。汝今往詣。文殊師利。問云何菩薩。學菩薩行。修菩薩道。具足成就。普賢所行。彼當為汝。分別演說。（昭和 1660）」

◇『八十華嚴』（巻 79）入法界品 T10,439a「善男子。汝當往詣。文殊師利。善知識所。而問之言。菩薩云何。學菩薩行。云何而入。普賢行門。云何成就。云何廣大。云何隨順。云何清淨。云何圓滿。善男子。彼當為汝。分別演說。（一切 1320-1321）」

◆実は文殊も普賢行を成し遂げた者であった。

◇『六十華嚴』（巻 60）入法界品 T09,783b「究竟普賢。菩薩所行。善男子。文殊師利。是汝善知識。（昭和 1660）」

◇『八十華嚴』（巻 79）入法界品 T10,439a「究竟普賢。所行諸行。善男子。文殊師利。童子。是汝善知識。（一切 1321）」

◆文殊は善財童子が次に普賢にまみえられるように取りはからった。

◇『六十華嚴』（巻 60）入法界品 T09,783c「是時。文殊師利。為善財童子。示教誨已。慰諭令其歡喜踊躍。令得成就阿僧祇法門。得無量大智光明。無量菩薩陀羅尼。無量大願。無量三昧。無量神通。無量智慧。皆已成就。復令得入。普賢所行。道場之內。既置善財。自所住已。文殊師利。還攝不現。（昭和 1661）」

◇『八十華嚴』（巻 80）入法界品 T10,439b「是時。文殊師利。宣說此法。示教利喜。令善財童子。成就阿僧祇法門。具足無量大智光明。令得菩薩。無邊際陀羅尼。無邊際願。無邊際三昧。無邊際神通。無邊際智。令入普賢行道場。及置善財。自所住處。文殊師利。還攝不現。（一切 1322）」

◆そして、善財童子は普賢にまみえ普賢行を成し遂げた。入法界品の話はそこで終わる。

◇『六十華嚴』（巻 60）入法界品 T09,785c-786a「爾時。善財童子。能自究竟。普賢所行。諸大願海。不久當與。一切佛等。一身充滿。一切世界。刹等。身等。行等。正覺等。自在力等。轉法輪等。諸辯才等。妙音聲等。方便等。無畏力等。佛所住等。大慈悲等。不思議法門。自在力等。（昭和 1669-1670）」

◇『八十華嚴』（巻 80）入法界品 T10,442b「當是之時。善財童子。則次第得。普賢菩薩。諸行願海。與普賢等。與諸佛等。一身充滿。一切世界。刹等。行等。正覺等。神通等。法輪等。辯才等。言辭等。音聲等。力無畏等。佛所住等。大慈悲等。不可思議解脫。自在悉皆同等。（一切 1331）」

以上は、上位から順に普賢、文殊、弥勒とする序列をしめすものであろう。ついでながら筆者は思うに、『道行般若經』（いわば初期般若經）『維摩經』は弥勒を、『阿弥陀經』『法華經』『涅槃經』は文殊を、『無量壽經』の梵本は弥勒をその漢訳は普賢を最上位の菩薩とするらしい。弥勒が必ずしも常に最も重要な菩薩であったわけではないらしい点は、注目されよう。一方、唐の玄奘が漢訳した瑜伽行唯識派の根本論書である『瑜伽師地論』の原典の内容は、弥勒が説いたものとされる。瑜伽行唯識派は弥勒信仰の流行あるいは復活の一翼を担ったグループともいえそうである。要検討。

## 8-2. 神変

『華嚴經』が説く「見える」ものの中で、文物や芸術作品のテーマとなり得るであろうと思われる一つの例として、ヴァイローチャナが現した神変（すなわち不思議な出来事、要するに奇跡）をあげることができよう。『華嚴經』には三昧（すなわち精神集中）により神変が現される例が数多く説かれているが、なかでも祇洹林において、ヴァイローチャナ（正確にはヴァイローチャナの色身すなわちシャカ）が師子奮迅三昧（師子頻申三昧）をもって現した神変が注目されよう。というのは、それは『華嚴經』の諸品の内で最大の品である入法界品の冒頭を飾る大神変であり、また『華嚴經』においては最上位の菩薩として扱われている普賢が詳しく説き明かす非常に重要な神変でもあるからである。

入法界品によれば、ヴァイローチャナは、師子奮迅三昧により、たとえば次のような神変を現したが、それは、すべての仏刹の莊嚴（すなわち仏国土あるいは浄土のすばらしい有り様）が一仏（ヴァイローチャナすなわちシャカ）の身体に入っている（ように「見える」）ものであったとされる。なお、声聞乗の者にはその神変が「見えない」ものであったとされるのは、先述したとおりである。

◇『六十華嚴』（巻 44）入法界品 T09,677b「何以故。如來善根。不可思議故。如來白淨法。不可思議故。如來威神。不可思議故。如來一身。充滿一切。法界自在。不可思議故。一切佛刹莊嚴。入一佛身。不可思議故。一微塵中。現一切佛。一切法界。不可思議故。一毛孔中。盡過去際。一切如來。次第顯現。不可思議故。放一光明。照一切刹。不可思議故。如來一毛孔中。出一切佛刹微塵等化身雲。充滿一切世界。不可思議故。如來一毛孔中。現一切佛刹成壞。不可思議故。（昭和 1232）」

◇『八十華嚴』（巻 60）入法界品 T10,320b「何以故。如來善根。不思議故。如來白法。不思議故。如來威力。不思議故。如來能以一身。自在變化。遍一切世界。不思議故。如來能以神力。令一切佛及。佛國莊嚴。皆入其身。不思議故。如來能於。一微塵內。普現一切。法界影像。不思議故。如來能於。一毛孔中。示現過去。一切諸佛。不思議故。如來隨放。一一光明。悉能遍照。一切世界。不思議故。如來能於。一毛孔中。出一切佛刹微塵數變化雲。充滿一切。諸佛國土。不思議故。如來能於。一毛孔中。普現一切。十方世界。成住壞劫。不思議故。（一切 970-971）」

ヴァイローチャナが現した以上の神変に関連し師子奮迅三昧を、普賢はたとえば次のように解説したとされる。それによれば、その三昧に入れば、ヴァイローチャナのそれぞれの毛孔の中に、無数のブッダが結跏趺坐し普賢行を説いているのが「見える」とされる。

◇『六十華嚴』（巻 45）入法界品 T09,683c「一一毛孔中、普現最勝海、佛處如來座、菩薩眾圍繞。一一毛孔中、無量諸佛海、道場處華座、轉淨妙法輪。一一毛孔中、一切刹塵等、最勝跏趺坐、演說普賢行。（昭和 1258-1259）」

◇『八十華嚴』（巻 61）入法界品 T10,327a「一一毛孔中、微塵數刹海、悉有如來坐、皆具菩薩眾。一一毛孔中、無量諸刹海、佛處菩提座、如是遍法界。一一毛孔中、一切刹塵佛、菩薩眾圍繞、為說普賢行。（一切 989）」

なお、『華嚴經』においては、以上のような神変はブッダのみならず、菩薩も現せるものである。たとえば、入法界品では、普賢が同様な神変を現している。それは善財童子には次のように「見えた」とされる。

◇『六十華嚴』（巻 60）入法界品 T09,784b-c「一一毛孔念念中。出一切世界微塵等。三世諸佛。充滿虛空。無依眾生。為作歸依。一一毛孔念念中。出一切世界微塵等。清淨佛刹。諸佛菩薩。充滿其中。教化成熟。無量眾生。（昭和 1664-1665）」

◇『六十華嚴』（巻 60）入法界品 T09,784c「爾時。善財見如是等不可思議自在神力。見已。歡喜踊躍無量。重觀普賢。一一身分。一一肢節。一一毛孔中。悉見三千大千世界風輪。水輪。火輪。地輪。大海寶山。須彌山王。金剛圍山。一切舍宅。諸妙宮殿。眾生等類。一切地獄。餓鬼。畜生。閻羅王處。諸天梵王。乃至人。非人等。欲界。色界。及無色界。一切劫數。諸佛菩薩。教化眾生。如是等事。皆悉顯現。十方一切世界。亦復如是。（昭和 1665-1666）」

◇『八十華嚴』（巻 80）入法界品 T10,440b「見一一毛孔念念中。出一切佛刹微塵數。三世佛刹雲。遍法界。虛空界。為諸眾生。無歸趣者。為作歸趣。無覆護者。為作覆護。無依止者。為作依止。見一一毛孔念念中。出一切佛刹微塵數。清淨佛刹雲。遍法界。虛空界。一切諸佛。於中出世。菩薩眾會。悉皆充滿。（一切 1325）」

◇『八十華嚴』（巻 80）入法界品 T10,440c-441a「爾時。善財童子。見普賢菩薩。如是自在。神通境界。身心遍喜。踊躍無量。重觀普賢。一一身分。一一毛孔。悉有三千大千世界。風輪。水輪。地輪。火輪。大海。江河及諸寶山。須彌。鐵圍。村營。城邑。宮殿。園苑。一切地獄。餓鬼。畜生。閻羅王界。天龍八部。人與非人。欲界。色界。無色界處。日月星宿。風雲雷電。晝夜月時。及以年劫。諸佛出世。菩薩眾會。道場莊嚴。如是等事。悉皆明見。如見此世界。十方所有。一切世界。悉如是見。如見現在。十方世界。前際後際。一切世界。亦如是見。各各差別。不相雜亂。（一切 1326）」

なお、筆者は思うに、『世記經』あるいは阿含經典にもとづく「宇宙的仏陀」あるいは「宇宙主的仏陀」と今日呼ばれることもある作品の中には、むしろ以上に関連する（筆者による仮称ながら）「神変仏」（すなわち神変を現したブッダ）あるいは「神変仏像」とも呼ばれるべきものもありそうである<sup>32</sup>。

### 8-3. 相好、大人相

『華嚴經』が説く「見える」ものの中で、文物や芸術作品のテーマとなり得るであろうと思われるもう一つの例として、普賢が他の諸菩薩に説いたとされるヴァイローチャナ（正確にはヴァイローチャナの色身すなわちシャカ）の「相好」（すなわち「大人相」、要するにすぐれた特徴）をあげることができよう。その特徴の数は、蓮華藏世界海（あるいは華藏世界海とも訳されるもので、おそらく蓮華藏莊嚴世界海あるいは華藏莊嚴世界海と同じもの）を十あわせ

---

<sup>32</sup> 次を参照。稲本泰生「観音菩薩萬五千佛圖」、49 頁。および拙稿「キジル石窟に描かれた大乘の神變佛について」。

た分量もある塵の数ほど多いものとされる。それにより、その特徴を説く品は相海品と呼ばれるらしい。

◇『六十華嚴』（巻 32）如來相海品 T09,601a「爾時。普賢菩薩摩訶薩。告諸菩薩言。佛子。諦聽諦聽。善思念之。當為汝說。如來相海。（昭和 919）」

◇『六十華嚴』（巻 32）如來相海品 T09,605a「佛子。於佛身中。有如是等。十蓮華藏世界海微塵數。佛大人相。於諸肢節。種種妙寶。以為莊嚴。（昭和 933）」

◇『八十華嚴』（巻 48）如來十身相海品 T10,251b「爾時。普賢菩薩摩訶薩。告諸菩薩言。佛子。今當為汝。演說如來。所有相海。（一切 761）」

◇『八十華嚴』（巻 48）如來十身相海品 T10,255c「佛子。毘盧遮那如來。有如是等。十華藏世界海微塵數。大人相。一身分。眾寶妙相。以為莊嚴。（一切 772）」

たとえば、次の相海品の内容によれば、ヴァイローチャナには、全身のうち頂上（すなわち頭の上）だけでも三十二種のすぐれた特徴が見られ、それは光りを放ち多くのブッダの色像を現すものであったとされる。

◇『六十華嚴』（巻 32）如來相海品 T09,601c「如來有大人相。名一切如來解脫雲。離垢勝寶。以為莊嚴。普照莊嚴。一切如來。師子之座。於其座內。悉現一切。如來色像。放大寶光明。演說無量。佛法大海。莊嚴一切。諸佛刹海。（昭和 921）」

◇『六十華嚴』（巻 32）如來相海品 T09,602a「如來有大人相。名明淨雲。寶華瑠璃月。放無量百千光明。普照一切法界虛空界。一切佛刹。普現十方。一切如來。（昭和 922）」

◇『六十華嚴』（巻 32）如來相海品 T09,602a「如來有大人相。名覺光明雲。一切寶光明。普照一切。法界諸佛。轉淨法輪。悉放如來。妙光明雲。普照一切。十方世界。（昭和 922）」

◇『六十華嚴』（巻 32）如來相海品 T09,602b「如來頂相。悉能莊嚴。三十二相。又能莊嚴。一切法界。（昭和 923）」

◇『八十華嚴』（巻 48）如來十身相海品 T10,252a「次有大人相。名一切如來解脫雲。清淨妙寶。以為莊嚴。放大光明。莊嚴一切。佛師子座。示現一切。諸佛色像。及無量佛法。諸佛刹海。是為十七。（一切 763）」

◇『八十華嚴』（巻 48）如來十身相海品 T10,252b「次有大人相。名毘盧遮那如來相雲。上妙寶華。及毘瑠璃。清淨妙月。以為莊嚴。悉放無量。百千萬億。摩尼寶光。充滿一切。虛空法界。於中示現。無量佛刹。皆有如來。結跏趺坐。是為二十二。（一切 763）」

◇『八十華嚴』（巻 48）如來十身相海品 T10,252b「次有大人相。名普照一切佛光明雲。眾寶妙燈。以為莊嚴。放淨光明。遍照十方。一切世界。悉現諸佛。轉於法輪。是為二十三。（一切 763）」

◇『八十華嚴』（巻 48）如來十身相海品 T10,252c「佛子。如來頂上。有如是三十二種大人相。以為嚴好。（一切 764）」

そして、相海品によれば、さらに頂上以外にも様々なすぐれた特徴が見られたとされる。以上のようなヴァイローチャナの相好についての考え方を展開させたものが、『六十華嚴』の訳

者である仏駄跋陀羅が漢訳したとされる『觀佛三昧海經』に説かれる考え方らしい<sup>33)</sup>。『觀佛三昧海經』の内容は、シャカは成仏前にすでに三十二相をもっていたのであるから、成仏後にはすぐれた特徴はそれよりも百千万倍になっている（いた）はずとする立場で展開されている。

◇『佛說觀佛三昧海經』（卷1）六譬品 T15,0645c-646a「今我在世。見佛色身。但見其外。不觀其內。悉達在宮。相師皆見。三十二相。今者成佛。光明益顯。過踰昔日。百千萬倍。佛涅槃後。後世眾生。當云何觀。佛身色相。如佛光明。常行尺度。惟願天尊。今當為我。及後眾生。分別解說。」

『觀佛三昧海經』には、たとえば次のようにも説かれている。「ブッダ（すなわちシャカ）は、アーナンダに告げた。『如來は、三十二種の（すぐれた特徴である）大人相と八十種の（さらなる特徴である）隨形好をもち、金色の光明を放ち、それぞれの光明に無量の化仏を現し、身体にある多くの毛孔からは、あらゆる種類の普通では見られない姿やブッダの色身を現す。」実に大雑把な（略中の略なる）説明ながら、われは今回ここに集まっている比丘たちと（わが父である）淨飯王のために相好（すなわちブッダの特徴）を略説する。ブッダは人が住する世界に生まれ人としてのことをなす時には、人としての姿であるから三十二種の特徴をもつと説く。（ブッダは）天人たちに勝るものであるから八十種の特徴をもつと説く。（ブッダは）菩薩たちのために（現れるものであるから）八万四千種の多くのすぐれた特徴をもつと説く。《ブッダ（正確にはブッダの色身）がもつ実なる相好（すなわち真のすぐれた特徴）》については、われは先にマガダ国の寂滅道場において成道し、普賢や賢首ら大菩薩たちのために『雜華經』（を説いたが、そこ）ですでに詳しく明らかにしたとおりである。...』と。」

◇『佛說觀佛三昧海經』（卷9）本行品 T15,687b「佛告阿難。如來有。三十二大人相。八十種隨形好。金色光明。一一光明。無量化佛。身諸毛孔。一切變現。及佛色身。略中略者。我今為此時會。大眾及淨飯王。略説相好。佛生人間。示同人事。同人相故。説三十二。勝諸天故。説八十好。為諸菩薩。説八萬四千。諸妙相好。佛實相好。我初成道。摩伽陀國。寂滅道場。為普賢。賢首等。諸大菩薩。於雜華經。已廣分別。...」

以上にいう『雜華經』とは『華嚴經』のことである。次の唐の法蔵による『華嚴一乘教義分齊章』（一名『華嚴五教章』）および唐の澄觀による『八十華嚴』の注釈である『大方廣仏華嚴經疏』の内容が参考になろう。

◇『華嚴一乘教義分齊章』（卷3）T45,497c「又觀佛三昧經中。約此三乘宗。分佛相好。以為三段。故彼經云。...解云。此中三十二相等。當略中之略。為人天二乘等。即當初也。八萬四千等。義當但是略。為三乘菩薩等。當次也。佛實相好。如雜華說者。義當廣説。即是指此華嚴相海品説。是一乘別教相。即當終也。以雜華即。是華嚴故。餘義可知。」

<sup>33)</sup> 『觀佛三昧海經』については、末木文美士「觀無量壽經」、140-147頁。および小野玄妙『健駄邏の佛教美術』、77-114頁。なお、同經については偽經説もあるらしい。次を参照。小笠原亜矢里「『觀佛三昧海經』と華嚴經類の関係について：「雜華」の文言を中心として」、714頁。

◇『大方廣佛華嚴經疏』（卷48）如來十身相海品 T35,865b「故觀佛三昧海經。辯相有三類。一略中略說。有三十二相。二略說。八萬四千相。三廣說。有無量相。如雜華經中。為普賢賢首等說。雜華即此經異名。」

したがって、『觀仏三昧海經』の内容は、『雜華經』すなわち『華嚴經』の考え方（とくにヴァイローチャナの色身に関する考え方）を意識して展開させた（された）ものといえよう。

ところで、法衣の上に化仏群が表現された特殊な意匠をもつ仏像の例として、雲岡石窟第18窟の本尊がいられている。その意匠は『觀仏三昧海經』の内容と関連するものとされ<sup>34</sup>、その像はシャカ像とする解釈もある<sup>35</sup>。また、その像の完成は後467年とされるが<sup>36</sup>、ヴァイローチャナ像（盧遮那仏像）が後500年より前に中国でおこなわれていたかどうかは疑問とする説も有力なようである<sup>37</sup>。しかしながら、筆者は思うに、もし『觀仏三昧海經』の内容と関連するものであれば、以上で考察したところから判断するに、その信仰の程度は如何であれ、その意匠は『華嚴經』の内容とも関連する可能性があることになろう。雲岡石窟第18窟の本尊はシャカであろうとする説に筆者は賛同するが、少なくとも意匠的にはヴァイローチャナの色身（すなわちシャカ）に関わるものと解釈することもできるのではなかろうか。いずれにせよ、従来おこなわれてきたシャカかヴァイローチャナかといった二者択一による考察からだけでは最終的な答えは見つからないような気がする。後考を待ちたい。

#### 8.4. 『六十華嚴』の内容

『華嚴經』が説く「見える」ものの中で、文物や芸術作品のテーマとなり得るであろうと思われるさらにもう一つの例として、〈宇宙の絶対的な中心に蓮の花（正確には蓮華藏莊嚴世界海と呼ばれる蓮の花の花托）があり、ヴァイローチャナはそこに常住し仏事を主宰している〉とも解釈を展開させ得る『六十華嚴』の内容があげられよう。

唐代の龍門石窟に関する一説によれば、『六十華嚴』においては、盧舎那は未だ『華嚴經』の中心的な存在ではなく、当時において国家仏教をおこなうにあたっては『梵網經』の方がよりふさわしい内容を有するものであったから、『梵網經』が所依の經典とされ、龍門を代表する盧舎那仏像としてしられる奉先寺洞の本尊如来像が造成され後675年に完成したとされる<sup>38</sup>。しかしながら、筆者は思うに、『梵網經』が用いられたらしいことはそのとおりであろうが、実のところは、必ずしもその説が述べるとおりではなかったかもしれない。というのは、『六十華嚴』の内容は、表現が難解なためわかりにくいものではあるが、当時において国家仏

<sup>34</sup> 劉慧達「北魏石窟与禅」、343頁。稲本泰生「觀音菩薩萬五千佛圖」、46頁。

<sup>35</sup> 岡村秀典『雲岡石窟の考古学：遊牧国家の巨石仏をさぐる』、97頁。

<sup>36</sup> 岡村秀典「雲岡石窟の初期造像：曇曜五窟の佛龕を中心として」、323頁。

<sup>37</sup> 水野清一「いわゆる華嚴教主盧遮那仏の立像について」、154-155頁。

<sup>38</sup> 正確なところは、次を参照。久野美樹『唐代龍門石窟の研究：造形の思想的背景について』、48-49頁、438-439頁。なお、同書についての書評として、次がある。倉本尚徳「書評：久野美樹著『唐代龍門石窟の研究：造形の思想的背景について』」。

教をおこなうにあたり、拠り所とするに非常にふさわしいものであったようにも思われるからである。『六十華嚴』の内容は、たとえば必ずしも以下のように解釈しなければならないものではないが、以下のように解釈を展開させることも可能であろう。おそらくは、奉先寺洞の本尊如来像の造成に関わった者たちは、大凡以下のように解釈していたであろう。

◆宇宙の絶対的な中心に、一輪の蓮の花が咲いている。その花の花托を蓮華藏莊嚴世界海という。なお、『六十華嚴』には、絶対的な中心とは説かれていないが、そうではないとも説かれていないので、そのように解釈することもできよう。

◇『六十華嚴』（巻3）盧舍那佛品 T09,412b「彼香水海中有大蓮華。名香幢光明莊嚴。持此蓮華藏莊嚴世界海。此世界海邊。有金剛山。周匝圍遶。（昭和 81、別 4-1-b.）」

◇『六十華嚴』（巻2）盧舍那佛品 T09,405c「蓮華藏莊嚴世界海東。次有世界海。名淨蓮華勝光莊嚴。（昭和 51、別 4-2-g.）」

◇『六十華嚴』（巻2）盧舍那佛品 T09,406a「此世界海南。次有世界海。名眾寶月光莊嚴藏。...此世界海西。次有世界海。名寶光樂。（昭和 51-52、別 4-2-h.）」

◇『六十華嚴』（巻2）盧舍那佛品 T09,406b「此世界海北。次有世界海。名琉璃寶光充滿藏。...此世界海東南方。次有世界海。名閻浮檀玻璃色幢。（昭和 52-53、別 4-2-i.）」

◇『六十華嚴』（巻2）盧舍那佛品 T09,406c「此世界海西南方。次有世界海。名普照莊嚴。...此世界海西北方。次有世界海。名善光照。...此世界海東北方。次有世界海。名寶照光明藏。（昭和 53-54、別 4-2-j.）」

◇『六十華嚴』（巻3）盧舍那佛品 T09,407a「此世界海下方。次有世界海。名蓮華妙香勝藏。...此世界海上方。次有世界海。名雜寶光海莊嚴。（昭和 55、別 4-2-k.）」

◆その一輪の蓮の花の花托（すなわち蓮華藏莊嚴世界海）に常住し仏事を主宰しているのが、盧舍那（すなわちヴァイローチャナ）である。なお、『六十華嚴』の内容には欠落や混乱などがある他、詳しい説明がないため、盧舍那が住するところの正確な位置はわからない。したがって、盧舍那は花托の上に坐していると解釈することもできよう（別 4-11.）。

◇『六十華嚴』（巻4）盧舍那佛品 T09,414b-415a「彼眾香水海中有一香水海。名樂光明。有一切香摩尼寶王莊嚴蓮華。①上有世界。名清淨寶網光明。佛號離垢淨眼廣入。②彼世界上。過佛刹塵數世界。有佛國。名雜香蓮華勝妙莊嚴。依寶網住。形如師子座。佛號師子座光明勝照。③彼世界上。過佛刹塵數世界。有佛國。名寶莊嚴普光明。依諸華住。形如日輪雲。佛號廣大光明智勝。④彼世界上。過佛刹塵數世界。有佛國。名雜光蓮華。佛號金剛光明普精進善起。⑤彼世界上。過佛刹塵數世界。有佛國。名無畏嚴淨。佛號平等莊嚴妙音幢王。⑥彼世界上。過佛刹塵數世界。有佛國。名華開淨焰。佛號愛海功德稱王。⑦彼世界上。過佛刹塵數世界。有佛國。名總持。佛號淨智慧海。⑧彼世界上。過佛刹塵數世界。有佛國。名解脫聲。佛號善相幢。⑨彼世界上。過佛刹塵數世界。有佛國。名勝起。佛號蓮華藏光。⑩彼世界上。過佛刹塵數世界。有佛國。名善住金剛不可破壞。佛號那羅延不可破壞。⑪彼世界上。過佛刹塵數世界。有佛國。名華林赤蓮華。佛號雜寶華鬘智王。⑫彼世界上。過佛刹塵數世界。有佛國。名淨光勝電如來藏。佛號能起一切所願功德。⑬彼世界上。有香水海。名淨光焰起。中有世界性。名善住。⑭次上復有香水海。名金剛眼光明。中有世界性。名法界等起。⑮次上復有香水海。名蓮華平正。中有世界性。名出十方化身。⑯次上復有香水海。名寶地莊嚴光明。中有世界性。名寶枝莊嚴。⑰次上復有香水海。名化香焰。中有世界性。名清淨化。⑱次上復有香水海。名寶幢。中有世界性。名佛

護念。①9次上復有世界性。名眾色普光。②0如是次上。復有世界塵數香水海及世界性。如一方。十方亦如是。盧舍那佛常轉法輪處。（昭和 92-93、別 4-11-b.）」

◆盧舍那がそこから全宇宙空間に向かって光を発している。

◇『六十華嚴』（巻 2）盧舍那佛品 T09,405c「彼諸菩薩見此光已。得觀蓮華藏莊嚴世界海。佛神力故。於光明中。而説偈言。無量劫海修功德、供養十方一切佛、教化無邊眾生海、盧舍那佛成正覺。放大光明照十方、諸毛孔出化身雲、隨眾生器而開化、令得方便清淨道。…盧舍那佛大智海、光明普照無有量、如實觀察真諦法、普照一切諸法門。（昭和 49-51）」

◇『六十華嚴』（巻 3）盧舍那佛品 T09,408a「盧舍那如來。轉清淨法輪。一切法方便。如來雲普覆。十方國土中。一切世界海。佛願力自在。普現轉法輪。一切佛土中。無量大眾海。言號各不同。而轉淨法輪。（昭和 59-60、別 2-20-c.）」

◆盧舍那が住する蓮の花においては、その花卉の一葉が一つの三千大千世界に相当する。なお、『六十華嚴』には、それぞれの三千大千世界がどこに位置するかを明らかにしめず説明がないので、そのように解釈することもできよう。この点は『六十華嚴』の宇宙論に関わる造形意匠を考える上で読み落とされてはならない重要な点と思われる。要するに、『六十華嚴』にもとづく限り、三千大千世界の位置については、自由な解釈が許されるのである。

◆それぞれの花卉の上には、シャカが坐している。なお、（正確なところは不明ながら、シャカとも解釈し得る）世尊が娑婆世界（すなわち一つの三千大千世界）において仏事を主宰しているらしいこと、また、世尊の足から発せられた光が娑婆世界を照らすらしいことなどから、そのように解釈することもできよう。

◇『六十華嚴』（巻 4）如來名號品 T09,419a「此娑婆世界中。諸四天下。教化一切種種身。種種名。處所。形色。長短。壽命。諸得。諸入。諸根生處。業報。如是種種。不同眾生。所見亦異。何以故。諸佛子。此四天下。佛號不同。或稱悉達。或稱滿月。或稱師子吼。或稱釋迦牟尼。或稱神仙。或稱盧舍那。或稱瞿曇。或稱大沙門。或稱最勝。或稱能度。如是等。稱佛名號。其數一萬。（昭和 112-113）」

◇『六十華嚴』（巻 4）如來名號品 T09,419c「此娑婆世界。有如是等。百億四天下。（昭和 115）」

◇『六十華嚴』（巻 5）如來光明覺品 T09,422b「爾時。世尊。從兩足相輪。放百億光明。遍照三千大千世界。百億閻浮提。百億弗婆提。百億拘伽尼。百億薊單越。百億大海。百億金剛圍山。百億菩薩生。百億菩薩出家。百億佛始成正覺。百億如來轉法輪。百億如來般泥洹。百億須彌山王。百億四天王天。百億三十三天。百億時天。百億兜率陀天。百億化樂天。百億他化樂天。百億梵天。百億光音天。百億遍淨天。百億果實天。百億色究竟天。此世界所有。一切悉現。（昭和 126-127）」

◆花卉の上（最上部分）に摩醯首羅天がある。したがって、シャカは摩醯首羅天に住して娑婆世界における仏事を主宰している。なお、天界の上層にあるらしい摩醯首羅天の天王が一つの三千大千世界の主のようであるから、そのように解釈することもできよう。

◇『六十華嚴』（巻 27）十地品 T09,574c「是名菩薩摩訶薩第十法雲地。菩薩住是地。多作◎摩醯首羅天王。（昭和 805、別 5-10-c.）」

◇『六十華嚴』（卷33）寶王如來性起品 T09,613a「譬如大雲降雨。大千世界一切眾生無能知數。若欲算計令心狂亂。除大千世界主、摩醯首羅天王。乃至一滯無不知者。以本善根果報力故。（昭和969、別5-10-d）」

◆花卉の中にあるそれぞれの四天下（すなわち須弥山世界）の閻浮提では、（花卉の上において一つの三千大千世界における仏事を主宰している）シャカの分身（したがって化身のシャカ）が成道し説法する。

◇『六十華嚴』（卷1）世間淨眼品 T09,395a「如是我聞。一時。佛在摩竭提國。寂滅道場。始成正覺。（昭和1）」

◇『六十華嚴』（卷5）如來光明覺品 T09,422b「如此見佛。坐蓮華藏師子座上。有十佛世界塵數。菩薩眷屬圍遶。百億閻浮提。亦復如是。（昭和127）」

◇『六十華嚴』（卷49）入法界品 T09,711c「一一世界中。各見百億如來。一一如來。大眾圍遶。放大光明。普照十方。或現兜率天。或現於一切世界。以妙音聲。轉淨法輪。乃至示現大般涅槃。（昭和1366、別2-20-e）」

◆そのシャカの分身は、師子奮迅三昧による神変をしめす。先述したシャカの祇洹林における師子奮迅三昧による神変の話をもとに、そのように解釈することもできよう。

◆その神変は、普通の者には「見えない」が、王（あるいは皇帝）と大乘の菩薩（したがって皇帝を取り巻く僧侶たち）には「見える」ものである。先述したシャカの祇洹林における師子奮迅三昧による神変が声聞乗の者たちには「見えない」ものであったが、大乘の菩薩たちと世界の諸王たちには「見える」ものであったとされる話をもとに、そのように解釈することもできよう。

筆者は思うに、『六十華嚴』の内容は総じて以上のように解釈を展開させることも可能であろう。したがって、『六十華嚴』は、当時において国家仏教をおこなうにあたり拠り所とするに非常にふさわしいものであったようにも解釈されるのである。そして思うに、『六十華嚴』の表現はとにかく難解であるから、おそらくは、それをわかりやすくしたものが必要となり記されたものが『梵網經』の該当箇所の内容であろう<sup>39)</sup>。『梵網經』の内容が『六十華嚴』の内容と齟齬をきたさない点は読み落とされてはならないであろう<sup>40)</sup>。さらに思うに、以上のように解釈を展開させ得る『六十華嚴』を根本たる所依の經典とし、わかりやすい『梵網經』の内容などを援用しつつ造成されたものが、たとえば龍門の奉先寺洞の本尊如来像であり、また奈

<sup>39)</sup> 『梵網經』については、次を参照。船山徹『東アジア仏教の生活規則：梵網經:最古の形と発展の歴史』。

<sup>40)</sup> たとえば、次にしめされる内容は齟齬をきたしている（峻別され得る）とする立場での議論である。筆者とは解釈を異にする。肥田路美『初唐仏教美術の研究』、219-223頁。

良の東大寺の大仏であろう<sup>41)</sup>。なお、『八十華嚴』では以上のような解釈は成立し得ない<sup>42)</sup>。  
この点は、後世において『華嚴經』が重要視されなくなった理由の一つとしてあげられよう。

### 8-5. 一世界一仏

『華嚴經』は、一つの四天下（すなわち一つの須弥山世界）に一仏であることを明らかに説く（別 2-20.）。

◇『六十華嚴』（巻 49）入法界品 T09,711c「一一世界中。各見百億如來。一一如來。大眾圍遶。放大光明。普照十方。或現兜率天。或現於一切世界。以妙音聲。轉淨法輪。乃至示現大般涅槃。（昭和 1366、別 2-20-e.）」

◇『八十華嚴』（巻 66）入法界品 T10,359c「一一世界中。有百億四天下。百億如來。或住兜率天。乃至般涅槃。一一如來。放光明網。周遍法界。道場眾會。清淨圍遶。轉妙法輪。開悟群生。（一切 1087、別 2-20-d.）」

ところが、次の『八十華嚴』の内容は、一つの三千大千世界においても一仏であることを明らかにしめすものである。なお、『六十華嚴』では対応する内容が欠落している。注意を払うべき内容といえよう。

◇『八十華嚴』（巻 8）華藏世界品 T10,43a-43b「此上過佛刹。微塵數世界。至此世界。名娑婆。以金剛莊嚴為際。依種種色。風輪所持。蓮華網住。狀如虛空。以普圓滿天宮殿。莊嚴虛空而覆其上。十三佛刹微塵數世界。周匝圍遶。其佛即是。毘盧遮那如來世尊。（一切 122-123 頁、別 2-20-b.）」

### 8-6. 虚空

虚空とは、全宇宙空間に相当するもので、（ブッダの法身そのものともいい得る）法界（正確にはブッダの法身が充滿する空間）が相互透過性（いわゆる無礙なる性質）をもって住するところの根本的な空間のことをいう<sup>43)</sup>。『華嚴經』が説く虚空は、『法華經』が説く虚空と同じく、空なるものである。一方、『涅槃經』が説く虚空は、無なるものであるから、同じではない。ここでは、虚空について詳しい十忍品などから情報を抽出し、『華嚴經』が説く虚空の特徴を明らかにする。

①虚空は、形をもたないものであるから、「見えない」ものである。

◇『六十華嚴』（巻 34）寶王如來性起品 T09,616a「譬如虚空。一切色處。非色處。無處不至。而非至非不至。何以故。虚空無形色故。（昭和 983）」

◇『八十華嚴』（巻 50）如來出現品 T10,266a「譬如虚空。遍至一切色。非色處。非至非不至。何以故。虚空無身故。（一切 802）」

---

<sup>41)</sup> 東大寺の大仏については、次を参照。拙稿「『華嚴經』の宇宙論と東大寺大仏の意匠について」。

<sup>42)</sup> 拙稿「漢譯『華嚴經』の原典『ブッダ・アヴァタンサカ・スートラ』の佛身論と宇宙論について」、239-236 頁（別 4-11.）。

<sup>43)</sup> 法界と虚空については、たとえば別 2-6.別 2-16.別 3-2.を参照。

◇『八十華嚴』（巻 43）十定品 T10,225a「了一切法。空無所有。所修諸行。從法界生。猶如虛空。無相無形。（一切 681）」

②虚空は、一切の処に住するものであるから、廣大無限なるものである。

◇『六十華嚴』（巻 28）十忍品 T09,582c「譬如虚空。住一切處。而虚空無分齊。（昭和 839）」

◇『八十華嚴』（巻 44）十忍品 T10,234b「譬如虚空。普入一切。而無邊際。（一切 710）」

③虚空は、不生不滅（したがって無始無終）であるから、常なるものである。

◇『六十華嚴』（巻 28）十忍品 T09,582b「譬如虚空。不生不滅。悉為一切。生滅所依。（昭和 839）」

◇『八十華嚴』（巻 44）十忍品 T10,234a「譬如虚空。無生無滅。能持一切。世間生滅。（一切 710）」

④虚空は、壊れず増減しない（すなわち変化をしない）ものであるから、楽なるものである。

◇『六十華嚴』（巻 28）十忍品 T09,582b「譬如虚空。不可破壊。（昭和 839）」

◇『六十華嚴』（巻 35）寶王如來性起品 T09,627a「譬如虚空界。世界若成若敗。常無増減。何以故。虚空無生滅故。（昭和 1030）」

◇『八十華嚴』（巻 44）十忍品 T10,234a「譬如虚空。不可破壊。（一切 710）」

◇『八十華嚴』（巻 52）如來出現品 T10,275a「譬如虚空。一切世界。若成若壊。常無増減。何以故。虚空無生故。（一切 832）」

⑤虚空は、現れているものでもあれば現れていないものでもあるから、空なるものである。したがって、我なるものではない。

◇『六十華嚴』（巻 28）十忍品 T09,582c「譬如虚空。一切世間。皆謂現前。實非現前。（昭和 839）」

◇『八十華嚴』（巻 44）十忍品 T10,234b「譬如虚空。一切世間。皆現其前。非現一切。世間之前。（一切 710）」

⑥虚空は、浄なるものである。

◇『六十華嚴』（巻 28）十忍品 T09,582c「善根清淨。如虚空色。善根趣一切道。（昭和 840）」

◇『八十華嚴』（巻 44）十忍品 T10,234b「如虚空清淨。遍一切處。（一切 710）」

⑦虚空は、無礙なる（すなわち相互透過性をもつ）ものでもある。

◇『六十華嚴』（巻 28）十忍品 T09,583a「得無量無礙。微妙音聲。以無礙如虚空故。（昭和 840）」

◇『八十華嚴』（巻 44）十忍品 T10,234c「得無量無礙。音聲身。無所障礙。如虚空故。（一切 711）」

## 8-7. 出三界

無上菩提（最上のさとり）は、三界を出たところにある。したがって、無上菩提は三界と同じものではない。

◇『六十華嚴』（巻13）如來昇兜率天宮一切寶殿品 T09,483a「欲令眾生。超出三界。一向正趣。無上菩提。（昭和412）」

◇『八十華嚴』（巻22）昇兜率天宮品 T10,119a「欲令眾生。離諸相著。示現一切。世間性相。而行於世。為其開示。無上菩提。（一切352）」

ブッダの法身も、三界とは同じものではない。ならば、無上菩提はすなわち法身か。要検討。

◇『六十華嚴』（巻45）入法界品 T09,682b「大智無礙身、非身難思議、如來淨法身、一切莫能測。不思議行業、起此清淨身、無量妙莊嚴、不染於三界。（昭和1252）」

◇『八十華嚴』（巻60）入法界品 T10,325c「智身非是身、無礙難思議、設有思議者、一切無能及。從不思議業、起此清淨身、殊特妙莊嚴、不著於三界。（一切985）」

## おわりに

『華嚴經』は、〈ブッダの法身はあらゆるところに遍満しているので、衆生はどこの誰であろうと普賢行をおこないさえすれば、ブッダの法身が色身を発現してくれるから、ブッダが「見える」ようになるので、ブッダにまみえることができるから、それでブッダから法を聞き、悟りを得る（すなわち自らブッダになる）ことができ、さらには無量の寿命を得ることができる〉と説く經典である。その基本的な考え方は、早ければ後2世紀はじめ頃までには成立していたようにも思われる。

小稿では、『法華經』や『涅槃經』の内容などと比較しながら、『華嚴經』が説く仏身についての理論を分析し初歩的な考察をおこなった。『華嚴經』は、「見えない」法身が「見える」色身を発現して（させて）仏事をおこなうと説く。また『華嚴經』は、とくに広大無限なる法身を設定し理論を大いに展開させた最初の經典（あるいはその一つ）といえそうである。

『華嚴經』は、「法身」と「色身」という二つの言葉を立てての理論であるから二身説による經典といえるものであるが、その内容からは四身説を展開させることも可能なようである。法身については、次の二種を展開させることができよう。その一つは、①そもそもは「見える」ものらしいが、努力が足りない者には「見えない」とされるもので、②広大無限なるもので、③ほぼ常（すなわち有始無終）なるもので、④楽なる（すなわち変化をしない）ものではなく、⑤空なるもので、⑥浄なるものであるから、③から⑥をまとめれば、常楽我浄なるものではない、〈ヴァイローチャナの法身〉である。もう一つは、①そもそもは「見える」ものらしいが、努力が足りない者には「見えない」とされるもので、②広大無限なるもので、③常（すなわち無始無終）なるものであるが、④楽なるものではなく、⑤空なるもので、⑥浄なるものであるから、③から⑥をまとめれば、常楽我浄なるものではない、〈いわば根本たる（あるいは諸仏の総体が融合し一つになったものともいい得る）ブッダの法身〉である。なお、両者の違いは③にある。

色身に関しても、二種を展開させることが可能であろう。その一つは〈法身が衆生らを教化するために状況に応じて発現する（させる）から「見える」色身〉で、この色身は『涅槃經』が説く生身に相当するものともいえよう。もう一つは、生身に相当するものではなく、ヴァイ

ローチャナと根本たるブッダの〈そもそも「見える」ものであるから、ありのままに「見える」色身（いわば如なる色身）〉である。

小稿では以上にあわせて、『華嚴經』においては、上位から順に普賢、文殊、弥勒とする序列が認められることを確認した。また、『華嚴經』が説く「見える」ものの中で、文物や芸術作品のテーマとなり得るであろうと思われる例として、たとえば、ヴァイローチャナの色身が現した神変、ヴァイローチャナの色身がもつ相好、そして、〈宇宙の絶対的な中心に蓮の花（正確には蓮華藏莊嚴世界海と呼ばれる蓮の花の花托）があり、ヴァイローチャナはそこに常住し仏事を主宰している〉とも解釈を展開させ得る『六十華嚴』の内容があげられることを指摘した。さらには、北魏雲岡石窟第18窟の本尊や唐代龍門石窟奉先寺洞の本尊をより正確に理解するためには、『華嚴經』（とくにそれぞれの成立年代から判断するに『六十華嚴』）をもう一度読み直して考察し直す必要がありそうなことをしめしたつもりでもある。

（2019年12月21日に口頭発表の原稿を加筆修正。）

#### 主な参考文献など

- 稲本泰生「観音菩薩萬五千佛圖」（『國華』第1313号、2005年）、46-49頁、46頁。
- 岩井昌悟「一世界一佛と多世界多佛」（『東洋学論叢』36、2011年）、138-164頁。
- 大竹晋「第五章、華嚴經の世界像：特に声聞乗との関係をめぐって」（高崎直道（監修）『智慧／世界／ことば』大乘仏典I、シリーズ大乘仏教4、春秋社、2013年）、213-234頁。
- 小笠原亜矢里「『観仏三昧海經』と華嚴經類の関係について：「雑華」の文言を中心として」（『印度學佛教學研究』67(2)、2019年）、714-717頁。
- 岡村秀典「雲岡石窟の初期造像：曇曜五窟の佛龕を中心として」（『東方學報』93、2018年）、281-328頁、323頁。
- 岡村秀典『雲岡石窟の考古学：遊牧国家の巨石仏をさぐる』京大人文研東方学叢書3（臨川書店、2017年）。
- 小野玄妙『健駄邏の佛教美術』（丙午出版社、1923年）、77-114頁。
- 荻原雲来（編）『漢訳対照梵和大辞典』増補改訂版（鈴木学術財団、講談社、1979年）。
- 梶山雄一『神変と仏陀観・宇宙論』梶山雄一著作集第3巻（吹田隆道編、春秋社、2012年）。
- 鎌田茂雄ほか（編）『大蔵經全解説大事典』（雄山閣出版、一九九八年）。
- 辛嶋静志「大乘仏教とガンダーラ：般若經・阿弥陀・観音」（創価大学国際仏教学高等研究所年報17、2013年）、449-485頁。
- 久野美樹『唐代龍門石窟の研究：造形の思想的背景について』（中央公論美術出版、2011年）。
- 倉本尚徳「書評：久野美樹著『唐代龍門石窟の研究：造形の思想的背景について』」（『史学雑誌』123(12)、2014年）、2186-2194頁。
- 桜部建「華嚴という語について」（『大谷学報』49(1)、1969年）、26-34頁。

末木文美士「観無量寿経」『観無量寿経・般舟三昧経』浄土仏教の思想第2巻（講談社、1992年）、3-195頁。

高崎直道『大乘仏教思想論Ⅱ』高崎直道著作集第3巻（春秋社、2009年）。

中村元『インド史Ⅲ』中村元選集決定版第7巻（春秋社、1998年）。

肥田路美『初唐仏教美術の研究』（中央公論美術出版、2011年）。

船山徹『東アジア仏教の生活規則：梵網経：最古の形と発展の歴史』（臨川書店、2017年）。

水野清一「いわゆる華嚴教主盧遮那仏の立像について」（『中国の仏教美術』、平凡社、1968年）、135-155頁。

劉慧達「北魏石窟与禅」（『考古学報』3、1978年）、337-352頁、343頁。

Falk, Harry (ed.): *Kushan Histories: Literary Sources and Selected Papers from a Symposium at Berlin, December 5 to 7, 2013*, Bremen, 2015.

Hikata, Ryusho: An Introductory Essay on Prajñāpāramitā Literature. in: *Suvikrāntavikrāmi-Pariprecchā Prajñāpāramitā-Sūtra*, Rinsen Book Co., 1983, pp.IX-LXXXII, pp.LII-LXXV. Gómez, Luis Oscar: *Selected Verses from the Gaṇḍavyūha: Text: Critical Apparatus and Translation*. Ph.D. dissertation, Yale University, 1967, pp.xxxiii-xxxiv, pp.lxviii-lxiv.

Osto, Douglas Edward: *The Gaṇḍavyūha-sūtra: a Study of Wealth, Gender and Power in an Indian Buddhist Narrative*. Thesis for a Doctor of Philosophy Degree, School of Oriental and African Studies, University of London, 2004.

拙稿「シャカの入滅年について：シャカムニとアショーカ王とカニシュカ王に関する歴史情報の相關分析」（『東方學報』95、2020年）580-524頁。

拙稿「漢譯『華嚴經』の原典『ブツダ・アヴァタンサカ・スートラ』の佛身論と宇宙論について」（『東方學報』93、2018年）、280-205頁。

拙稿「『華嚴經』の宇宙論と東大寺大仏の意匠について」（『日本研究』51、2015年）、21-40頁。

拙稿「須弥山世界に関する諸説と東大寺大仏蓮弁須弥山図について」（稲本泰生(編)『東アジア仏教美術における聖地表象の諸様態』平成二五年度～平成二七年度科学研究費補助金・基盤研究(B)研究成果報告書、2016年）、1-32頁。

[http://www.sinologie.uni-wuerzburg.de/fileadmin/04050130/user\\_upload/Sotomura-2016-](http://www.sinologie.uni-wuerzburg.de/fileadmin/04050130/user_upload/Sotomura-2016-A_World_in_a_Petal.pdf)

[A\\_World\\_in\\_a\\_Petal.pdf](http://www.sinologie.uni-wuerzburg.de/fileadmin/04050130/user_upload/Sotomura-2016-A_World_in_a_Petal.pdf)

拙稿「キジル石窟に描かれた大乘の神變佛について」（『東方学報』91、2016年）、528-502。

拙稿「東大寺大仏蓮弁毛彫図について」（『南都仏教』、2014年）、88-116頁。

## 後記

本研究発表のために、岡村秀典教授からご支援ご協力をいただいた。記して御礼を申し上げます。